

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第122号 (2016年7月)

風に吹かれて (100)

白井啓治

・猛暑の梅の木むら 雀らの議会は賑やか

我が家の梅の若木、葉が密集し過ぎに茂っている。この梅の木に、十羽程の雀が村を成して、朝からお喋りが賑やかしい。四月ごろから、古米が残っていたので庭石に撒いてやっていたら、今はもうそれがお決まりになってしまった。毎朝六時に米粒を撒いてやるのだが、その時間が少しでも遅れると催促の音が喧しい。

我が家族であるお犬一人、お猫二人も日々の時間には非常にやまかしい。早朝四時になるとお犬が散歩の時間だと起こしに来る。わざと知らん振りをすると、お猫の二人が時間だと知らせに来る。お猫は、お犬の散歩が終わると朝食がもらえるので、他人事ではないのだ。これは、大雨であろうが、台風であろうが変わりない。

数日前の猛暑の日、梅の木村の住人雀達が、他の村の雀ら呼んで、重大会議が何かを始めてしまった。そのあまりにも大勢の声に、ややッ棕鳥が来たのかと一瞬焦ってしまったが、そうではなく雀らの会議だったのだ。

雀の習性など全く知らないが、他の群を呼んで話し合いと言うのか、親睦会と言うのか良く分

らないが、どうやら集まりを持つようである。日中の一番暑い時間帯に、梅の葉陰に止まって何かの話し合いをしているようである。何とも不思議な光景であった。

雀らの会議のことは全く分からないが、人の世もまた良く分からないことが続発している。イギリスに起こった国民投票によるEU離脱の決定などはまさしく訳の分からない動きを見せている。EU離脱をあり、決定したまではないが、旗振りをした当事者たちが皆その後の事を放棄してしまった。自分の役目は終わったなどと話している。この会報が出来上がる頃には、参院選も終わって結果が出ているだろうが、参議院に三分の二以上の議席を確保し、憲法改正を行い、私の役目はこれまで、どこか安全そうな国に移住でもしてしまったらもう取り返しがつかなくなる。

とかく群れたがる人の社会は、時の空気に飲まれ流されやすくなるものだ。勢いで屋根に上ったまでは良いが、梯子を外され右往左往し、責任を持つ者が居なくなってしまう、体制だけが独り歩きして人は身動きが取れなくなってしまう。

人の社会は、ズーッとこれを繰り返している。科学技術だけがドンドンと進化しているのに、人の精神体質だけが進化しないとなれば、何とも情けない限りである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会も11年目に入りました。

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

先月、当会報ふるさと風と兄妹のことば座の十周年記念行事が終わりひと昔の区切りをつけた。今のメンバーがそのまま次のふた昔の区切りまで元気に書き続けていられるかの保証はない。小生も今年は7度目の申の干支迎え、これから先のことは大した計画を持つことは出来ない。せめてこの会報には「見るでござる」「言うでござる」「聞くでござる」の三申を続けたいものと思っている。

極楽とんぼの甘ったれ

菅原茂美

それは私の事。幾多の甘い夢を見ては、真つ向から大外れ。大当たりなど、殆どない。

30年前の私の予測。21世紀初頭には「がん」は克服（予防・治療とも）。貧富の差は解消され、誰でも中流階級。曲がつて狭い市内の道路も、多少は広くなるだろう。寝室の壁にテレビの映像を拡大映写。完全自動運転の車が走行。新生児と老人は、社会がしっかりと保護・介護。福祉の行き届いた時代がやってくる。そして世界も、叡智を結集して、争点の禍根を解決し、今より、はるかに平和な時代がやってくる……。ところがどっこい、世の中は、そんなに甘いものではなかった。

一方、私の現実には、悪性リンパ腫の抗がん剤で、苦悶中。日頃、心して生活習慣病など防いでいたのに……。更に老後の「安定生活」など、ほど遠い。「老いる」という事は、体にガタが来るという事。私など、がんを三つも経験。妻も病気がち。夫婦ダブル入院するなどは、夢にも思わなかった。

更に世界情勢は、いつまで経っても安定しない。経済格差、難民・移民、核保有、そして宗教など、騒々しい限りである。恐らくこれらの問題がクリアーされ、世界が平和で、どの国も国民は生活が安定し、バラ色のユートピアなど、まず夢の夢。私の予測は殆ど絵に描いた餅に過ぎなかった。

いくら極楽とんぼでも、世間の厳しさは多少、理解していたはず。そうは問屋が卸すまい……と承知はしていたが、30年も経てば人類も智慧を働かし、多くの難問も解決できているはず……と樂觀予測するあたりが私の甘い所。なんでなんで、人間なんていう生き物は、そんな優しい動物ではない。

とにかく争いが好きで、強い者が弱者を虐げ、かすめ取り、俺さえ良ければそれでよい。群れの中で、より己の地位を上げ、より強い権力を把握しようとする。生半可な知恵などで、その強烈な本能を抑え込む事はできない。小集団から国家・世界にいたるまで、この原則は崩れそうにもない。下剋上は、いずこの世にも多数存在した。

【勢力争いは夫婦間でも起きる。ある日の新聞川柳に『ああ定年 明日から妻が わが上司』と。ましてや組織内、自治体、国家、国際機関いずこも勢力争い、即ち縄張り争いである。生き物は、己の生きる場を主張して命がけ。植物だってあの苦味やえぐみは昆虫に対する毒素である。葉を食われまいとする進化の結果である。太陽の光を独り占めしようとするヤブカラシの根性など、正に恐れ入りました。動物は動けるから表現は実にリアル。悉く縄張り争いで生きている。人類とて全く同じ事。後から発達した前頭葉が司る理性など、旧脳が支配する本能により、簡単に蹴飛ばされる。強欲な者が世界を支配する。しかし、人類は急に大脳を膨らまし、他に迷惑をかけず、平穩に暮らす選択肢を強く求める傾向も定着してきている。理性が本能を制御する傾向も多少はあり、それが社会の潤滑油になっている。】

とは言え、誰でも望んでいながら、それができないという事は、人類が抱えている根本的理由が何かあるに違いない。それを私並に分析してみると、人類誕生以来700万年間、狩猟採集の遊走生活・農耕牧畜の定着生活、いずれにおいても、結局、強い者が勝つ。強い者が多くの子孫を残す。強い者が増えれば、争いになり、更に強力な者が世間を支配する。しかし敗者も黙ってはいない。隙

あらば、逆転を狙う。こうして小規模組織から大規模組織まで、バトル合戦が行われる。それが嵩じれば最悪は世界大戦。人類は何度もこんな愚かな行為を繰り返してきた。

しかし諦めてはいけない。夢は追い続け、あるべき姿は実現に向かって、永遠に追い続けるべきである。夢を追い続けてこそ、生きる希望が燃えてくる。国連も、「非難決議」など、空念仏を唱えているだけではなく、実力行使で問題解決。乱暴者を見逃しておくべきではない。

*

さて私は、本業は何とか勤め上げ子や孫はそれなりに成長したが、八十路を迎え、昔なら「長老」として人の範たるべきところを、そんな物は何もない。それゆえ、「私の夢」を「人類のあるべき姿」に置き換え、吼えまくっている。

この会報は自己責任で、何を書いてもよろしい……という事なので、文明批評やら、「人間とは何者か？」について、生物進化論的に、独善と偏見を顧みず、多くの私見を述べてきた。理想論はいくらでも書けるし、儂い夢とはいえ、それが私の生き甲斐でもある。

夢を追い続ける老境の極楽とんぼ。人に嗤われようと、果てしなくこの「偽の文明」で荒れ果てた広野を、さ迷い歩き、いずこかに「知の泉」を探し当て、そこを発信源として、人類のあるべき姿を、高唱し続けたい。

さて発信源は、継続性と真実性が、十分伴っていないければならない。そのためには、まず徹底的な調査が必要である。しかし歴史書などというものは、大方、戦いに勝った者に都合よく書かれており、勝者は正義。敗者は逆賊。それでは話にな

らない。真実を知る因（よすが）とはならない。むしろ戦に負けた者が、涙ながらに書いて、土蔵の奥に仕舞い込んでおいたものを、後に子孫が偶然発見。そんな例こそ歴史は真実に近いのではなからうか。名のある歴史書だけが正しいとは限らない。科学の世界でも、新米学者がセンセーショナルに何かを発表しようものなら、古老学者に、寄つてたかつて捻り潰されたりしている。

何はともあれまずは健康。健康を維持するためには、日頃の摂生が必要である。生活習慣病は、内臓年齢を老化させる。歯の数、血圧、動脈硬化、不整脈、コレステロール、血糖値、肝腎心肺機能など、これらが健全でなければ内臓年齢の老化も早い。内臓年齢が若ければ、よしんば「がん」に罹患しようとも回復のスピードが速い。何項目もある内、一項目でも多く正常ならば回復は早い。

*

さてこれまで私は、『何とかなるさ』で過ごしてきた。懸命に働いて、定年後は時間がたつぷりあり、好きな事を十分楽しみ、バラ色の終末期を迎える事ができると、漠然と考え、呑気に過ごしてきた。しかし、当てにしていた定年時の預金利率は、今やスッカラカン。年金は減らされ、介護保険など天引き。やる事なす事、若い日に見た夢は、真つ向から外れていく。愚痴のオンパレードみたいで、情けないが、極楽とんぼには、身の制度劣化が、いささか厳しゅうござんす。

とはいえ、くよくよしても始まらない。ある程度の努力は絶対に必要。それを怠らなければ、セレブにはならなくとも、何とか生きては行ける。それほど豊かでなくともよい。程よい生活をエンジョイできればそれでよい。病氣や家計に制約は

あるにしろ、趣味三昧に没頭できれば、こんなうれしい老後はない。

*

脱線するが、そもそも文明の進化速度というものは、焦つてはいけない。ゆっくりでよい。「種の寿命」というものを私はいつも考えている。ホモ・エレクトスから30万年前に分岐したネアンデルタール人は、比較的短命でわずか27万年で尽きた。混血したサピエンスに青い目と金髪を残して。

同じく弟分の我々ホモ・サピエンスも、エレクトスから20万年前に分岐したが、兄貴分のネアンデルタール人と同じ種の寿命と仮定したら、残りはずか7万年である。知恵を働かせ、地球環境にやさしい生き方をすれば、種の寿命はもつと伸びるだろう。しかし、経済優先・軍事優先などで、危険なオモチャ作り（核兵器など）に現を抜かす、アホらしい政策を続ければ、地球環境を汚染するだけで、庶民は安穩に暮らせない。更に人類は、他のどんな生物よりもセックスが大好きで、食糧や資源があろうがなかるうが子供を作り過ぎる。世界人口は、毎年なんと8500万人も増え続けている。自らその数をコントロールできない生物の未来に光明は見えてこない。歴史学者によつては、サピエンスの残り時間は、7万年どころか、1万年だつて怪しい……とも言っている。

霊長類の最高位に残った3種のチンパンジー。それは我々ホモ・サピエンスと、コモン・チンパンジーとボノボであるが、最も性格的におとなしいボノボを除けば、チンパンジーとヒトは、あまりにも残忍で猛猛な品種である。仲間同士で殺し合いをする愚か者である。特にヒトは急速に大脳を膨らまし、地下をほじくり、巨大なアリ塚（ビル

など）を築き、あらゆる乗り物を超高速化。私に言わせれば、それは「偽の文明」という事になる。それが他の生物を滅ぼしたり、環境を破壊しないのなら、ある程度は許される。しかし現実には、愚かな発展競争のオンパレード。功名心のなせる業か？ こんな愚行の繰り返しでは、種の寿命はそう長くはないと思われる。

今からほぼ40億年前に、この地球の海の底で、ただ1個の細胞らしきものが誕生した。現在の全生物は、その子孫である。全てDNAを生命の設計図としている。細胞らしきものは、何度も試行錯誤を繰り返して、徐々にまともな「いきもの」らしく進化を続けた。単細胞時代をなんと30億年も続けた後、やつと多細胞生物へと進化し、脊椎動物は、32億年前、やつと雄と雌とに分かれ、クローンによる絶滅を回避する。生殖の際、雌雄両者が遺伝子を半分ずつ持ち寄り、シャッフルして新たな個体を生む。両親の生存に有利な遺伝子を多数受け継いだ子は生き残る確率が高くなる。こうして生物は進化を遂げ、今生きている全生物は、環境の変化、即ち海水や大気の成分急変などの強烈なストレスを潜り抜けた優れ者である。

海中は、長い年月の間に海底火山噴火などで、酸性化・酸欠・温暖化や寒冷化で、全生物の9割近くが絶滅する危機を何度も繰り返し、生き残った者が再生し、再び賑やかに繁栄を続ける。直近5億年間だけでも、全生物の9割近くが絶滅する大事件が5回もあつた。その最後は6500万年前、直径10kmの巨大隕石が中米ユカタン半島に落下し、恐竜が滅び、鳥類と哺乳類という温血動物が繁栄する大ハブニングである。

なぜこんな諄々（しんしん）い事を長々述べるかという

と、種の進化は、華々しくパツと咲いてパツと消えてゆくよりもスローでよい。ゆつくり、マイペースで何百万年も、いや、シラカンスのように4億年も「姿形」をほとんど変わらない進化のペースで、地球にやさしい進化の方向こそ、真の進化スピードと信じるからである。即ち、人類のように、急激に大脳を膨らまし、母なる地球表面をガチャポコ引つ掻き回し、文明は急速に発展した……などと寝言を言ってるから、私はそれを「偽の文明」と呼びたいのである。種の寿命を永続したいのなら文明進化の速度を、もっと緩めるべきである。なにもかも競い合う物質文明の行く末を、それでよいのか？……と言いたいのである。

*

ホモ・サピエンスの進化のスピードは、正に狂気の感がある。人類という「種」を放出した後のチンパンジーは、700万年経ってもあまり変わり映えはしない。しかし滅びるのでもなく、過剰繁殖するのでもない。地球環境に合わせて、細々ながら、しっかり生き続けている。

地球の人口収容能力は、50億人とも言われるが、現在73億人となり、自らの人口をコントロールできない浅知恵の人類。バツタは、狭い島で異常繁殖したら、たちまち草を食べつくし、集団で海に飛び込み自殺するという。バツタの轍を踏むな。

それゆえ、こんなに地球環境を荒廃させる現在の人類は、未来を見通せぬ愚かな生物とも言える。明日の事は我知らず。今、自分が生きている間だけ、便利で豊かならそれでよい。国益第一。そんな未熟な政治は、空を飛ぶ雁の眼から見たら、「国境線」など、ナンセンス極まりないもの。その国境線にこだわら、何千年経っても人類というアホ

な生き物は、境界線を重んじ過ぎる。「縄張り」に翻弄される原始的な生物。それがホモ・サピエンスなのだ。バカは死んでも治らない。相変わらず、未来の子孫の資源など、俺の知った事じゃない。今の今、俺さえ良ければそれでよい。どうやら人類は、そのように進化したらしい。そしてアホな文明を栄えさせ、環境を破壊し、生きにくい地獄を拡大して今日に至った。

ユートピア？……そんなもの夢のまた夢。一部の強欲な者が、他人の財をかすめ取って局部的にセレブに暮らす輩もいるが、一般大衆はその日その日を懸命に生きていくのが精一杯である。すべての人民が平穩に暮らせるのが真の進化。

いかに利己的な遺伝子に支配されている人類といえども、もう少し穏やかな、フレンドリーな生活ができないのかとも思う。私のようなオッサンチョコチョコの極楽とんぼでも、平穩に暮らせる世の中にしたいものである。例え儂い夢でも永遠に追い続けたい。何もセレブ生活を高望みしているわけではない。程よい緊張感で、程よい衣食住が確保されれば、満足である。

私が悪性リンパ腫という血液がんにやられた時に書いた文章は、小学生にも笑われるような単純ミスを犯し、何度繰返し見直しても、全く気付かなかつた。例えて言うなら、王貞治は生まれる何百年も前から、ホームランを打ち続けていた……といった塩梅。自分では正常のつもりでも、病に伏している時は、ステロイドの投与によりハイテンションになり、どこかが狂って、単純なミスに気付かない。病気の時は、ものなど書かず、ゆっくり静養が必要であつたのかもしれない。

*

さて肝心要の趣味の件であるが、これもやつぱり中途半端。プロ級になれず、アマの域を出られない。囲碁は64年間も打ち続け、今はそちこちのクラブで6段格。棋院の試験を受けたら5段も怪しい。パソコンの5段と闘って勝ったり負けたりだから。次は日曜大工。7つの電動工具を使い、ゴチャゴチャ作りまくっている。その作品数え切れず。物置を作っては壊し、また造る。そして花木園芸。44年間続いているが、皐月5鉢の根元はビール瓶くらいの太さになった。アケビ(5葉と3葉はもつと太い。6月初旬の今、皐月、葵、山法師、梅花ウツギが満開競演中。東洋ラン・西洋蘭に20年位没頭したが、難しすぎてギブアップ。

家庭菜園にも嵌まりっぱなし。取立て野菜のおいしいこと。抗がん剤で、足元ふらふらしつつも、畑を杖ついで、見廻らずにはいられない。

そして趣味といえるかどうか、究極はこの物書き。現役時代、研究論文は多数書いたが、同人会誌にコラムなど、想像もできなかった。ヒョンなきっかけて、本会に入会・投稿を続け、最近100か月連続休まず投稿を成し遂げた。会報にものを書く書式など何も知らず、思うが儘、独断と偏見を顧みず、ただただ吼えまくるのみ。『老犬は無駄吠えをしない』というが、老いたればこそ、多くの経験から、現社会の矛盾や配慮不足。そして、人の道のあり方・世界の進むべき方向など、人類進化のあるべき姿を高らかに述べまくりたい……というのが現況である。乱筆乱文の無作法であるが、多くの方々にご支援を頂き、感謝いたします。

水郷潮来（一）

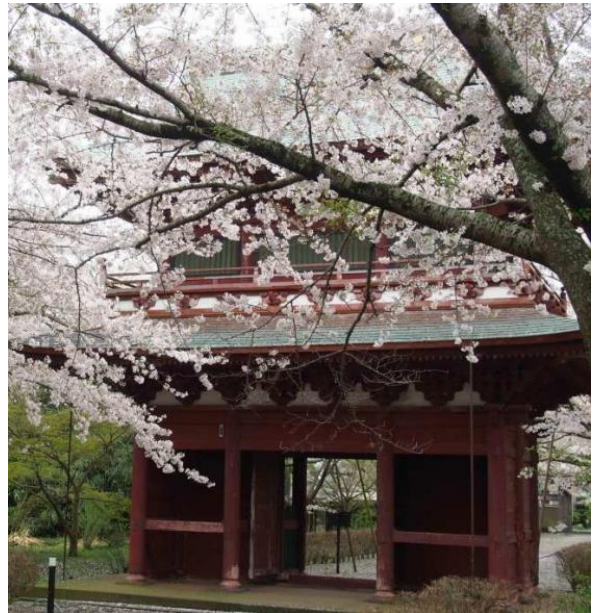
前回まで潮来と延方とをまとめて紹介してきたので、水郷潮来を中心に紹介しましょう。

・鎌倉ゆかりの寺「長勝寺」

潮来の町としてまず紹介すとすればこの鎌倉ゆかりの古刹の寺を紹介すべきでしょう。この寺は源頼朝ととても縁が深い寺で、一一八五年に源頼朝が創建したと伝わります。一一八五年といえは壇ノ浦で平家に勝利したとしてであり、今では鎌倉幕府成立の年とされています。この年に潮来で何があったのかはよくわかっていません。同じ潮来の辻にある「硯宮神社」は一一八〇年頃に頼朝が鹿島神宮に戦勝を祈願してこの地で祈願文を書いた時に使った硯（すずり）を奉納したといわれています。また頼朝はこの後常陸国府である府中（石岡）にも佐竹氏追討にやってきて大矢橋事件が起こっています。この長勝寺はその後消失して廃れていたものを水戸光圀が京都の妙心寺の僧侶を招いて復興させたそうです。

入口山門から本堂に続く間の参道は春には桜が5月には新緑がとても美しい寺です。

数回訪れているが決まって桜が散る時季に来てしまいが、このひらひら舞い落ちる桜の花びらの風情もまた良いです。この楼門形式の山門は、制作年代もあまりはつきりしませんが室町時代と考えられています（県指定文化財）。説明によると、元禄時代（江戸初期）に普門院（前の延方地方で紹介した）の山門として建立していたものを水戸光圀がこの寺に移したと伝わります。



入り口には「長勝禅寺」とあります。海雲山長勝寺（臨済宗の禅寺）です。

本堂と鐘楼

この古刹「長勝寺」は、やはり鎌倉界限を彷彿させる。山門をくぐると正面に立派な本堂が見えてきます。藁葺きの本堂は堂々としてその風格を感じます。造りは桃山時代と考えられると書かれています。笹竜胆の家紋（寺紋）などが施されており源氏を祀る寺です。

臨済宗という禅寺ですから鎌倉時代以降から室町時代頃にこの寺が臨済宗になったのでしょうか。頼朝がこの寺を創建して、その後臨済宗となったものと思われまふ。

この長勝寺には明治の時代にすでに国の重要文化財となっている銅鐘があります。この鐘は1330年（元徳2）に北条高時が源頼朝の菩提の為に寄

進したもので、鐘銘の作者は、鎌倉円覚寺十六世清拙和尚（大鑑禪師）で、鋳物師は甲斐権守卜部助光だそうです。鐘の銘に「客船夜泊常陸蘇城」と書かれています。

常陸蘇城ということは、この常陸国板来（潮来）が中国の蘇州の風情に似ていたのでしょう。

この時既にここは水運が発達していたのです。1330年頃ですから、江戸時代よりかなり前です。たくさんのお客船がこの潮来の湊に停泊していたようです。北条高時はその後、新田氏に鎌倉を攻められて31歳で自刀してしまいます。歴史の流れを感じます。この寺の本尊は「釈迦如来」アヤマ祭りの時に本堂の扉が開いていたのでじっくり拝ませていただきました。この潮来の長勝寺は鎌倉の円覚寺と関係が深かったようです。

潮来の駅家

境内を散策していたら「潮来の駅屋（うまや跡）」という碑を発見しました。

奈良や平安時代に古東海道や東山道の官道の途中に馬を常備させた駅屋（うまや）が置かれました。潮来はこの東海道から外れますが、常陸国国府（石岡）から鹿島神宮までの道があり、その途中に置かれたと言われています。

常陸国府（石岡）——曾尼（曾称）駅（旧玉造町手賀—板来駅—鹿島神宮のルートです。曾尼（曾称）（そね）というのは常陸風土記に「提賀の里より北に、曾尼の村がある。昔この地に住んでいたそねびこといふ佐伯の名から名付けられた。今は駅家が置かれている。」と書かれています。そのため、手賀の少し北のあたりとされます。

一方こちらの板来駅は、調べてみると弘仁6年

(815)にこの駅は廃止となり、曾尼駅から直接鹿島神宮に向かつていたといわれています。かなり初期のうちに廃止になったのですから、場所の特定は難しいと思われます。また、この頃は水上のルートもあり、この道の利用状況はわかりません。この古道の駅の多くが未だに場所が特定されていません。

その他に、芭蕉が鹿島紀行(寛享4年・1687)で残した歌の歌碑や、昭和7年に建立の連句碑があります。芭蕉が根本寺の和尚を訪ね、鹿島神宮に詣でた後、帰路に潮来の医師本間自準亭に泊まったといわれています。こちらは後で鹿島地域の方で詳細を書きたいと思います。

稲荷山と女子技芸学校跡

潮来の街は常陸利根川を挟んだ低地の水郷地帯を中心に広がっていますが、その北側にこんもりとした森がある。それが稲荷山です。稲荷神社です。すから当然キツネ像が置かれています。

下から赤い旗に導かれて階段を上ると正面に稲荷神社社殿があります。しかしこの高台のところを国道51号線が走っているのです。国道とは同じ高さになる。国道側から入ると森林公園のような雰囲気、左手には「稲荷山古墳群」があるという。右手に稲荷神社がある。この神社の階段上から潮来の街を見渡せる。この稲荷神社は宝暦13年(1763)に京都伏見稲荷から分霊して、最初は麓の長勝寺内に置かれたが、その後この山に神殿を建てて奉納した。歴史としては江戸時代ということとそれほど古くは無いが、江戸時代にはここ潮来は水運の中心地となり、街も華やかであった。

この森の中に潮来のシンボルとして色々な記念

碑が置かれていた。古墳群の森の中に立派な「菊池寛の碑」が置かれていた。また、稲荷神社西側には「茨城百景水郷潮来」の碑があり、その横に「野口雨情と中山晋平」の歌碑「船頭小唄」があった。また少し変わったものとして、神社の近くに「潮来町立女子技芸学校跡」の碑が立っていました。

この技芸学校は、明治40年に神社の横に建てられ、昭和13年に東の下の方に移転したようです。この技芸学校というのはいかにも潮来らしいですね。その後高等女学校になり、現在の県立潮来高校となりました。京都などは芸子や舞妓などの養成学校のようなのですが、潮来も江戸・明治頃は花街として賑わったようですが、この学校はあまりそのような養成学校とは違うようです。

西円寺と一茶句碑

長勝寺の近くにある「西円寺」を紹介します。梅龍山西円寺 浄土真宗大谷派の寺です。別名中寺(なかつら)。元禄5年(1692)、親鸞の孫「如信」の弟子、「潤信」が開基といわれています。

門の正面に潮来市指定の文化財されている大きな銀杏の木があります。そして、寺には昔遊郭としてもにぎわった潮来らしく、遊郭の主人が亡くなった遊女を寺に吊って建てた墓があると書かれています。一回りしたがよくわからなかった。さて、もう一つこの寺には小林一茶の句碑があります。小林一茶は文化14年(1817)5月26日に鹿島詣の後、大舟津より舟で板久(潮来)に来て俵屋に宿泊します。『七番日記』より

鹿島詣をして、

大舟津ヨリ舟渡 六十四文

板久 俵屋泊 百五十文、
そして翌27日に船で銚子に行きました。
晴 卯上刻出船 二百六十四文
未下刻銚子二入

(一茶の日記に船賃や宿泊代などが記されている)

そしてこの寺にある碑に特徴があります。一茶の句碑には「三味線で鳴(しぎ)を立たせる潮来かな」漱石 と彫られています。一茶の句を夏目漱石が書いたものが使われています。その句の下に小川芋銭が書いたという絵が添えられています。

潮来のアヤメ



潮来といえば水郷情緒とアヤメです。まずは中心となっている前川アヤメ園に行ってみました。前川は北浦から潮来の街を通り、常陸利根川に流れ込んでいる川で、この川沿いに江戸時代は仙台藩などの河岸がありました。

潮来観光の目玉ともなっている花嫁舟や十二橋巡りも潮来の常陸利根川の対岸側の加藤洲とは別に、こちらの前川の方が中心となっています。

この前川アヤメ園や与田浦の水生植物園などもたくさんのお店が出ていました。

潮来の前川アヤメ園の船着き場から前川十二橋巡りの櫓こぎ舟が出ています。このアヤメ園からは潮来花嫁さんのイメージで女船頭さんが櫓を漕ぐ舟も出ていますが、女船頭さんも人手不足で、男船頭さんの数が断然多いです。また近くからはエンジン付きの舟もたくさん出ています。

前川アヤメ園の入口と船着き場の前には2つのモニュメントがあります。「潮来花嫁さん」(唄…花村菊江)と「潮来笠」(唄…橋幸夫)です。この2曲は同じ年の発売です。今から50年以上も前です。また潮来笠は橋幸夫のデビュー曲でした。あの頃まではここ潮来も股旅物のイメージがかなりあったようです。

加藤洲(潮来出島)

潮来を流れる前川が常陸利根川にそぐ場所に潮来の「十二橋巡り」の船乗り場があります。前川あやめ園を見学した足で、ここにやってきました。よく見慣れた水郷の女船頭さんが二人で入口に腰をかけていました。いろいろなコースの所要時間と料金の書かれた看板があります。女船頭さんも、お年はもう若くはありません。大ベテランなのかもしれませんね。顔に刻まれたしわの深さに、ここで長い間暮らしてきただろうとても良いお顔でした。この十二橋というのは前川にあやめ園を中心に十二の橋があり、そこを巡るのがAコースで、またB、Cコースはこの常陸利根川と

利根川にはさまれた中洲に残る与田浦などの水路を巡るものでこちらも別な「加藤洲十二橋」があります。

加藤洲とはどんなところか潮来から向こう岸に行ってみました。ここは江戸時代になってからできた中州であり、広大な耕作地が作られ、いくつもの水路が張り巡らされています。隣の家に行くにも水路を渡らないといけないので、いくつも橋がかかれました。橋の数が十二もあったので、この橋を巡る観光舟が運行されています。元々この地の生活に舟が使われていたのです。

潮来は茨城県ですが、常陸利根川を挟んだ加藤洲は千葉県香取市になります。加藤洲の入口に水門があり、加藤洲十二橋めぐりの舟がここから水路に入っていきます。舟がやってくると人が操作して水門を開けます。川沿いの道も車で行くには狭くて大変です。また川沿いは両側に民家が続き、橋も基本的にはこの民家の間をつなぐ生活橋です。加藤洲は「かとうす」ではなく「かどうず」と読みます。江戸時代に行われた利根川の東遷事業によつて、この地に広大な中州が誕生し肥沃な土地となりました。何故加藤洲というのかはよくわかりません。家康が名付けたともいわれます。昔は加藤洲村といわれ、公官洲新田、附洲新田などという地名もあり新田が多く作られました。この新田の間をきれいな水路がはしり、移動は船の方が便利だったようです。またこの洲の中を大きな川のような湖「与田浦」が広がっています。また与田浦の東側の中州は一ノ分目、三ノ分目などの地名が続きます。この中洲地帯はほとんどが水田で、いろいろな干拓事業で一大コメの耕作地になりました。この中州に小学校の分校が二つ残されてお

りましたが、最近廃校となりました。これも時代の流れでしょう。

潮来のあやめ祭りは六月の最終日曜までです。

梅雨の晴れ間の夕がた6時過ぎに利根川土手沿いの道から与田浦を目指して車を走らせました。潮来から与田浦に一番近いのが与田浦橋で、ここにも与田浦十二橋巡り(舟遊び)の舟が留められていました。時間も遅かったのでお客さんはおりません。東京浅草などもお座敷船などがよく出ており、中で宴会などでもできるようですが、こちらの舟は「舟遊び」の言葉が似合うような小型船です。船の中は長テーブルと両側に座布団が10〜15人位分が敷かれています。まわりを透明なビニールで覆って風や雨よけがついています。この与田浦橋周辺には観光舟が7〜8艘置かれています。自転車などはこの与田浦周遊(約10km)など楽しめると思います。

水郷というと潮来と思いますが、潮来は茨城県で、その対岸は利根川とのあいだの中洲になっていてこの地域や、佐原の街も水郷といわれています。与田浦の一番西側に「水郷佐原水生植物園」があります。園の中には水路が有り、観光用の舟が動いています。やはりたくさんあやめも咲いています。この園の入口には「おんな船頭唄」(三橋美智也)の像と歌詞、そして音楽も流れるようになっていました。この横の与田浦に十二橋巡りの船の発着場があります。潮来と与田浦の両方に来て、この水郷めぐりのイメージがやっとわかりました。

(続く)

県指定文化財（14）

兼平智恵子

今から一二七五年前、第四代聖武天皇の御代に、地震や凶作のための飢饉、伝染病の大流行、そして反乱と度重なる混乱・不安に対し、聖武天皇がとつたのは「仏頼み」、仏教の力によつて国を治めることでした。

天平一三年（七四二）聖武天皇より各国々に「国分寺建立の詔」があり、常陸国の中心であつた石岡の地にも、七四七〜七五七年内には常陸国分僧寺、尼寺が創建されたとされています。

現在石岡市ふるさと歴史館（石岡市立石岡小学校敷地内）において、第八回企画展「常陸国分寺 東国の大寺」と題し六月一日より八月二十八日まで開催されています。

国分寺建立の詔（現代語訳）「続日本記」天平十三年（七四二）三月乙巳（二十四日）の条

「私は徳の薄い身であるのに、おそれ多くも天皇という重い任務を受けている。しかし……」

と聖武天皇詔の時のご心境や常陸国分僧寺跡の発掘調査の状況や貴重な出土品など御覧できます。

入場無料、十時〜十六時半、月曜日のみ休館。常陸国の中心として最も繁栄した奈良、平安時代に思いをはせご来館をお待ちしています。

本題の県指定文化財のご紹介は八郷総合支所の北方約五〇〇mの高友丘陵の景勝地に存在する古墳です。

○丸山古墳 史跡

指定 昭和二七・一二・一八

丸山古墳は八郷盆地のほぼ中央に占める高友丘陵の景勝地に存在する全長約五五m高さ七mの全

国でも珍しい「前方後方墳」です。

この高友山は古くから第十代崇神天皇の第一皇子、豊城入彦命の奥津城と伝承され聖地として崇敬されてきました。

昭和二七年一二月に学術調査が行われ、その結果後方部の墳頂下約二mの地点から粘土床が発見され、その中から内行花文鏡をはじめ、銅鏃、勾玉、管玉、鉄刀、刀子などの副葬品が出土しました。これらのことから、丸山古墳は前方後方という珍しい墳形であるとともに、副葬品の内容などから、四世紀末ごろに築造された県でも代表的な古式古墳になっており、東国の古墳時代の研究には欠かせない存在となっている。

なお出土遺物は昭和四二年十一月二四日に考古資料として県の文化財に指定されました。

県指定文化財になっている遺物名と数量

○内行花文鏡 一

○勾玉 九

（硬玉・蛇紋岩・瑪瑙・碧玉岩・琥珀の各種）

○管玉 九

（碧玉岩製）

○丸玉及び小玉 一三八

（ガラス製）

○銅鏃 四

○鉄刀 三

○鉄剣 六

○刀子 一

以上遺物の中の一部は八郷地区中央公民館内に展示されており見ることが出来ます。

そのほか遺骸の頭部と推定される場所には水銀朱（死者の復活を祈り遺体にまかれていたもので、県内では取れず、近畿地方の古墳ではよく用いられたことから丸山古墳に葬ら

れた人が巨大な前方後円墳が多数ある畿内の影響を受けて取り寄せたものであると思われる。：中央公民館内に展示）がまかれているなど、ヤマト王権との密接な関わりが想定されている。

また丸山古墳の周囲には、中世の城跡である「高友古壘」の空堀がめぐっている。古墳が櫓台として利用されたとも考えられ、立地の良さを物語っている。

丸山古墳を六月二〇日に久し振りに訪ねました。以前は団体での見学でしたので、おぼろげなまま。八郷総合支所の後方の道路を西へ、支所を通り過ぎると信号のある十字路を右折、左側に丸山病院、橋を渡り凡そ直角の右カーブの左側の民家の塀に、丸山古墳三五〇m、高友遊水池三〇〇mと看板ありそこを左折。道なりに左カーブを進んでいくと左側に高友遊水池を見ながら進む、間もなく白いガードレールのある橋の手前右側に古墳への急な登り坂、ほどなくして、古墳の駐車場に到着。

古代の墳墓、中世の空堀がゆつたりと深緑の静けさの中にありました。春には桜見で賑わうそうです。（参考資料 八郷の文化財 石岡の歴史と文化）

・勢揃い青田 見下ろす紫峰の山 智恵子



前略 皆々様

にわやま ゆみこ

ふるさと風をお読み頂いている皆々様、改めましてこんにちは。にわやまです。スリと波に乗ったままご挨拶が遅れて申し訳ありません。

こんな気持ちになったのも先日、6月18、19日に催された、ふるさと風の会、ことば座十周年記念展に参加したからです。

実を言うと別の話題の原稿があったのですが、これはすぐにお伝えしたい、とおもい急遽変更しました。

さて、そこで私は何を感じたかといいますと、「ん？ 私はもしかして今、ものすごい人達と一緒にいて、おそろしくおもしろいところにいるんじゃないかしら？」ということですよ。

ただのおじさんとおばさんじゃない！（失礼）個性溢れる「アーティスト集団」で、誰よりも石岡を愛しているんだ！（たぶん）ということによって、うやく気がつきました。自己表現をしているように利他の精神を芯に感じます。

目上の方に無礼ですが、「自由でのびのび書きなさい」という白井さんを勝手に、師匠と呼び、会員の先輩方をまるで親族かのように気楽におもっています。それもこれも皆様の懐の深さ。とても心地よく大の字で甘えております。

そして、記念展ではファンのお客様やお世話になっっている方々に多くおこし下さり、風の会のあたたかさを感じわと身にしみこんできました。読んで下さった方に、面白かったよ！と声をかけて頂いてとても嬉しく感じました。

皆様お気づきかと思いますが、私は先輩方のように言葉を操ったり、美しい旋律をえがく事はでき

ませんし、皆様をうならせるような情報や知識も持ち合わせておりません。ですが、これからも元コギヤルの目線から地元地域での面白いワンシーンを切り取ってフレッシュに（35歳ですが）お届けできたらと思っています。のびのび。と雑ば違う気もしていますが、今の所、私の頭の中の文をそのまま紙面に載せてもらおうと思っています。自分で言うのも気持ち悪いですが、これから私の中身もどんどん変化していくはずなのです。沢山の人のに出逢いながら、色々な世界をみながら、文章も変わっていくのではないのでしょうか。それを自身でも楽しみたいと思います。見苦しさもどうかあたたかく見守っていただけると嬉しいですよ。

（追伸）身の回りに私と同世代の方はいらつしやいせんか。一緒に書くお友達を随時募集中です。ぜひご紹介ください。

十周年記念公演を振り返って

小林幸枝

6月18、19日にギター文化館で行われたふるさと風の会、ことば座の10周年記念展及び記念公演には、大勢の方にいらしていただき有難うございました。

ことば座の記念公演には、今年も札幌から熊谷敬子さんが友情出演でいらしてくださいました。熊谷さんの友情出演も今年で3回（三年）になりました。今年はパンフルートの竹笛太郎が熊谷さんの応援で参加してください、ギター文化館に新しい音を響かせてくださいました。

今回は10周年記念公演ということで、「里山の風に恋歌の舞う」と題して、これまで舞ってきた詩の中から、私の好きな舞詩を選択させてもらい演じました。中でも、鈴が池物語の鈴姫の舞は、私が初めて手話舞を演じた思いで深いもので、今は亡き居合で日本一に選ばれた池田忠男様の剣舞との共演で物語を演じたこともありました。

常世の国の恋物語百を目指して、公演活動をやってきましたが、この10年で三十五話まで進みました。百話までの道のりは未だ遠くありますが、白井先生にもまだまだ。頑張っていただし、達成を目指したいと思います。

これからも変わらぬ応援を頂けます事、改めて宜しく願い申し上げます。

豊かな漁場・柏崎を行く

伊東弓子

今回はとても気が重かった。馴染みの薄い所だからだと思う。でも三ツ谷、高架津、小津で聞いた話は「柏崎の漁師らは人数が多い、元気がいい、舟も大きいのを持っているし、遠くまで出かけていた」という言葉に期待を込めて取掛った。下見も遠くなると、行き帰りに時間がかかるのでつい億劫さが先に立ったが、自転車の自由さ、私の足だから頑張れと背中を押してた。車で応援してくれる友、妹の協力も有難かった。車での動き、コースの確認アドバイスなどに助けられての出発だった。

今度も古道に行くことになる。古くは、人口は少なく、木々が鬱蒼と茂り、水辺も多かったら

う。小動物に襲われたことがあったり、花々が心を、疲れを癒してくれたりして、幾多の人が足を運んだ道だろう。私達もその一人のつもりでも、便利な車の中では現代の不満など口にしながら行く有様だった。井関の農家の人が「家の前のこの通り、なんでも古い通りだそうだ」と話してくれたのが耳に残っている。

観音堂は省略する訳でもなかったが、通り過ぎてしまった。

太宮神社の前に立つと、この地域の人達が心にかけてきれいにしている様子を感じた。玉里の大宮神社は光圀公の時、大宮明神が今の名に変わったと聞く。ここの太宮神社はどうなのだろうか。社に奉納されている太宮（安食）八景の短冊が八枚あるということがわかった。波逆千鳥、霞帆帰風、猿峰秋月、小津漁舟、折戸落雁、筑波夕照、大島社若、菱木網代、八景のことは土地の人にも聞いてはいたが、今回、はつきりしてよかった。あの方に報告しようと思う。県指定文化財「鰐口」と記された立看板が目に入る。大部立派な物のようだ。「鰐口って何に使われたのですか」と聞かれたがはつきり説明が出来ず、後で調べておきますと、留めてしまった。忘れないで調べることに。

下軽部の長福寺へ向かう時だった。安食の坂を下る時、間違い、戻る時も安食の坂で迷い、時間が掛かってしまった。こういう先導者では参加者もどんなにか不安だったろう。三十年位前、先生と友に誘われて夕方、薄暗い灯の集会所に来たことがある。女達の念佛の聲が私の心を落着かせてくれたことを覚えている。あの時間いた話では、歴史ある寺だったとか。伽藍も大きかったとか。床も高く縁の下で餅着きをしたという話が伝わっ

ているということだった。あの時の集会所は今も正面にあった。山門の左側にある椎の木がどつしりと時の流れを物語っている。これが「出島の椎」と呼ばれている銘木だった。下見の時、門前の人家で聞いたが、今となつては女達も老いて施設に行ったり、あの世に逝ってしまった。その後を継ぐ女達がいけないという。過去の出来事を草々が語っているだけだった。

急な坂で戸惑い、太子古墳へは遠回りしてしまった。大きな個人宅の南端に、ひよっこりと顔を出している古墳は、この辺一帯に存在感を確り示していたことだろうが、何故こんなに小さくしか残っていないのだろうか。古墳に沿って小道がある。昔からの道だと聞いた。随分前のこと、この辺りの社や、畑の中の石祠を搜したり、柊塚の事を尋ね歩いたことがあった。あの頃、先生も必死で柊塚の所在を搜していた頃だった。

春の芽吹きをあちこちで感じる。道沿いに草々が、林の木立に木の芽が、椿は花盛り、桃も淡い桃色の顔を出し始めた。

富士見古墳へは、二手に分かれて行った。車で行くグループ、歩いて登るグループだ。下見の時、期待した桜も左程咲いていない。古墳の英雄の墓を飾る花も、高台を行く風の冷たさには簡単には開けないのだろう。塚の頂上から常陸国風土記の主人公ともいえる土地、土地の素晴らしさが目に入る。左眼下の方にあの出来事が見え隠れしているようだ。波の音と共に船頭の嘲笑う声、悔しがっている漁師達の声、玉里御留川に出ている^{②③}宮久保川上^{②④}宮久保川下の出来事だ。土地の漁師達が網をかけていた所へ、小川御手船二艘が乗り込んで網を引き切って逃げてしまった出来事

が文書にあった。よい場所に眠っている英雄も人の世の有様を見聞きしてきたことだろう。と思つたりして空を見上げてみた。

柏崎地区は入江に出来た地区だ。水辺から真つ直ぐ素鷲神社に向かつて家並みが続いている。幕末の頃の「柏崎宿通」の略図に各種の商店が並び、銭湯や宿屋があった様子がわかる。農家は後側にあったという。今は一軒づつ石塀で囲まれている。空き家もある。商店は一軒しかなかった。ご主人は区長さんもして何かと協力してくださった。

素鷲神社は町の奥、山の下に小振りの姿でいた。竹切り祇園祭の盛んだったのは、漁で栄えた町が元気で、人々がいきいきしていた頃のこと、絵馬には確り描かれている。「竹切り祇園祭の主役は刀だよ。その刀を研いでいたのは家の爺ちゃんだった」と話してくれた女の人に合った。お爺ちゃんの代で終わっただけだね、と自慢げに話してくれた。鳥居の右側は寺の跡らしく、石佛や墓石があった。淋しさをそそるお堂が影を落としている。家並みの出口に細い道があり、堤防がある。水神さまともう一体、得体の知れない物があつた。今回調べるのを忘れてしまった。続いて大きなドッグがあつた。舟の数は多いが、通りがかりの人の話では土地の人の物だが、使っている人は少ないという。^{③②}札幌川、^{③①}天王下川、^{③⑦}よご入江川、^{②⑨}すさき川（前川）、^{②⑧}下田尻川、^{②⑦}上田尻川、^{②⑥}よも川、^{②⑤}終下川（五右衛門川、境川）柏崎は御川筋地域になるが、こんなに沢山の漁場があつて豊かで活気ある所だったのだと、再確認した。今は、どこもそうであるように、コンクリートの堤防に阻まれ、魚を育ててきた水は汚れ、ぶつかっては跳ね返っているだけだ。いきいきした魚はい

ない。ビニールハウスの影になって一部しか見えない終塚と、遠くに小さな稲荷の森を確認して土手を降りた。加工場の傍から栗山商店に入った。卸業と小売りをしている店で柏崎はここの軒についてしまったようだ。店で佃煮、干魚を求めたのは女の人が多かった。お茶をご馳走になれる筈だったが、お母さんは具合悪いとのこと、若い人には言い出せず一寸残念だった。疲れを引き摺りながら歩いて車に向かった。卑しさが残って恥ずかしい。在の方に会社形式で加工業をしている建物が見えた。会社だから工場は休みだそうだ。

渡し舟のあった頃の悲しい出来事を聞いた。土地の人三々四人連れ立って大洗の方へ、たんかいを取りに行ったそうだ。沢山とつて帰り、浜から乗る時、「こんなに多くては舟が危ないから減らしてほしい」と船頭が言う。「折角とつたんだから置いていくのも残念だ」と聞かずにみんな積んで乗り込んだ。柏崎を目の前にして沈没し、たんかいも人も亡くなったという。その後、渡し舟は止めたという。

堤防のない頃のこと、ここの庭まで水が来た、と百米も田の続く方を指さして話してくれた人もいた。

草取りをしていた九十歳のお婆さんが、嫁に来た頃、家の間のこの細い道まで水がきた。そんな時はこの道沿いの人はどこへ行くにも履物をもって、手拭を首にかけ、水のない所まで歩いた。そこで履物をはいて用足しに出かけたもんだ。買い物でも、墓参りでも、実家に行くにも苦にならなかったと、遠い日の生活を話してくれた。

豊かな漁場と題名を飾ったが、それは過去のこと。今は新宅した人、移り住んだ人、転業もいろ

いろ。すっかり様がわりしたが、命をかけて生きてきた漁師の心意気は受け継いでいつて欲しいと願って帰ることにした。

古代道を通るのも今回で終わりになる。敢て、霞ヶ浦の魚料理ではないが、少し早い花見と洒落てお寿司屋さんに寄った。ここのご夫婦の好意を沢山いただいた。このご夫婦の好意を留川を知ってくださる人が増えたと喜びながら次回に繋げていける力が湧いてくる歩く会だった。古代道を多くの人が歩いて、歴史や文化、社会を育ててきたことだろう。私達もこの道を歩き続けていきたいと願っている。



【風の談話室】

《特別寄稿》

終りの初め…

ギター文化館代表 木下明男

再び…本部から督促（人事交代）が…！

9月まで、後任者に仕事（館長）を委譲することが確認されました。皆様に支えて頂いたギター文化館の運営、長い間本当にありがとうございました。これから、年内決まっているコンサートの実施と、移行のための諸準備をしなくてはなりません。6年間毎日続けた、ブログも今日が最後（5月31日、毎日続けるのは）になるかな…？

先日像のはな子さんが老衰で…。像のはな子は、1947年にタイで生まれ、タイでの名前は「カチャー」2歳半の時、タイから日本に贈られた。1949年8月22日にデンマーク船オラフ・マックス号でタイを発ち、9月2日に神戸港に着いた。そして、貨物列車とトラックを使つて、9月4日に上野動物園に到着した。

当初、上野動物園では「カチャー子」と呼ばれていたが、公募により、戦争中に餓死した「花子」（ワナリー）の名を継いで「はな子」と名付けられた。上野動物園には、「はな子」到着のすぐ後の1949年9月25日にインドから贈られた「インディラ」も到着し、年末までの3か月間で100万人近くの入園者が訪れるゾウ・ブームが起きた。此の頃の事は、小学生だった私も覚えていた。それだけに「はな子」さんの名前にも愛着がある。

69歳（像の平均寿命は65歳？）とか？ 昔は、人間の寿命とほぼ同じと言われていたが、いつの間にか人間の寿命が、遥かに長くなって仕舞ったようだが、今更ながら、生きる者は全て終わりがあ

る事を実感？

昔からの言葉にもある「盛者必衰」「生者必滅…」何事も、何時までも続かない、そして生あるものの死を迎える…？

人間に限らず万物、生がある限り、滅がある。『平家物語』の冒頭にある「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理（ことわり）をあらわす。（祇園精舎の鐘の音は「世の中に不変はないと言っているように聞こえる。沙羅双樹の花の色は、盛んな者は必ず衰えることを表している。思い上がった者

は長く続かない」

・有為転変は世の習いⅡ栄枯盛衰

・驕る平家は久しからずⅡ生者必滅

・諸行無常Ⅱ生ある者は必ず死あり

・月満つれば則ち虧(か)くⅡ日中すれば戻き、月

盈つれば食く／盈つれば虧く

・物盛んなれば則ち衰う／羅紈(らかん) 有る者は

必ず麻削(まかい) 有り(「羅◆嗟」とは、薄絹(うす

ぎぬ)や白絹(しろぎぬ)でつくられた美しい服の事。

「麻◆饑」は、麻(あさ)と菅(すげ)でつくられた粗

末な服の事横文字にも、こんな格言が All that's

Fair must fade. (美しいものは皆必ず衰える)

個人としてはそうであつても、多くの人の思いや、理念は長く続かせたい！ 昨日まで平気だったのに、今日は蹟く…衰えにきずく自分に愕然として、当たり前の様に過去を振り返る…？ 晩年を迎えた人間、余生をどう生きてゆくのか？ 易しい様で、難しい…中々我執を捨てられず、無欲になれない！

「考え方、思い方というのは、いつでも自分中心。 好い日とか悪い日とかいっても、それはどこまでも、自分にとって都合の好い日であり、自分にとって都合の悪い日。 つまり、すべて自分の都合…という〈物差し〉に合うか、合わないかの話。『日日は好日』と言う言葉があるが、日常生活の中では、嫌な事がいっぱい起こり、日日好日どころか、毎日が悪日の連続。

「なんの悪いこともしないのに、私だけがなんでこんなに苦しまなければならないのか。 神も仏もあつたものではない」と、自分の不幸を嘆く。 好い日、悪い日と比べず、自分の都合という〈物

差し〉を捨て、どんなに都合の悪いことが起きても、そのことを、どう受け止めていくか、それが一番大事。 自分の都合、自分の〈損得〉勘定の物差しを離れて、あるがままに受け止めていく、つまり、貴重な体験、貴重な反省の機会として受け止められたら、悪い日がそのままで、好い日に転換するのでは？ 病気をしたお陰で健康のありがたさが身に沁みて判る。 病気になってからでは遅い。 しかし『わかっちゃいるけどやめられない』のが人間の愚かさです。 病気の時は病気を、命いっばいに生きることです。 病気の時を、健康の時と比べたらそれは悪い日になります。 病気の時は、病気と自分と一緒に生きることです。 コンクールに落ちたら、正々堂々と来年に再挑戦することです。 誰かが落ちなければ優勝する者はいないんです。 縁がなくて、自分が落ちる側にまわっただけの話です。 病気の時は病気になるきる、落選の時は落選に、それが病気や落選という災難(なやみ)から解放される妙法だというわけで、それが日日是好日ということ。 おかしい時には腹の底から笑い、泣きたい時には手放しで泣く―それが日日好日の生き方。」

終りは、新たな始まり…。

そうです、何事も終わりはあるのです！ そして、終りは新たな事の始まりに繋がるのです！ 此の世も彼の世も、宇宙も、地球も、自然も、無機物も、植物も、動物も…必ず、始まった時から終りが約束されているのです！ 終りが無ければ、新たな始まりはないのです。

動物も、植物も、微生物も、細菌も、ありとあ

らゆる生物は、次世代を創るために、現生を生きています。 次世代を創る事が、生きている証でもあるのです。 そのために、雄がいて雌がいる…雌雄が合わさる事で、次の生命が生まれる。

年取って朽ち果てても、生きると言う事は対性を求めるのです。 虫でも、魚でも、鳥でも、蟹でも、貝でも、樹でも、草でも、花でも…年老いても、異性を求めるのです。 生きる証だからです、人間だけが衰えると色恋から…？ 昔から、衰えの象徴として、目・歯…？ と言いますが、生物学的な経年劣化は現実としても、それでも、生きている証として、精神的に若くありたい、美しい音楽を聴き、美味しい食事をし、楽しい恋をしたいものです！ 音楽や芝居や芸術の原点です！ 此処を、美しい、楽しい、綺麗…を、求める老若男女の、フォーラムとして育てていきたいですね。 何時までも何時までも体の芯に青春を…？

1966年1月…東京、函館、新春交流会に参加！ 白一色、凍て付いた初めての北海道は猛烈に寒かった。 初めての夜行列車、初めての青函連絡船、函館港に着くと仲間たちによる熱烈な出迎え！ 宿は初めて合う仲間の家での民泊。 20代前半の私には、次々起こる出来事が初めて尽くし…？ 楽しむよりハラハラドキドキの連続…何時の間にか、仲間の中で活動が続ける決意が…？ この交流会を主導し、私たちを熱烈に迎えてくれたのが、佐藤美津雄事務局長…！ それから50年余にわたり、佐藤氏との親交は続く。 夢助師匠経由で、体調が…？ そして昨年計報が…残念ながら、6月の葬儀には行けなかった。

今回忍ぶ会の知らせを頂き、自らの区切りも兼

ねて、参加することを決意！ 慌ただしく、函館に向う：忍ぶ会の参加者は：？ 皆数十年ぶりに会う人ばかり、高石ともやさんや横井久美子さんのコンサートを聴くのも久し振り、楽しみです。

ともやさんの歌とトークから…

「命尽きる時、拍手で送られる、涙は止めて、拍手を送ろう！」

「行き切って死んでいく、大好きなおばあちゃん幸せそうな顔をして、かわいそうでない」

「つないだその手は、きずなはとこしえに」

空の上まで、きずなはとこしえに」

♪ we shall over come... we shall over come... 溢れる涙。

感謝！感謝！感謝！

この高石ともやさん、今年も40回目の「ホノルルマラソン」を走るそうです、まだまだ青春の高石ともやさんに、夢を頂きました！

そして、私の原点：佐藤美津雄さんの座右の銘

「美しい人間が美しい音楽を創り！」「美しい音楽が美しい人間を創る！」

いつまでも、そんな「ギター文化館」でありたいと、願うばかりです！！！！

「働かないアリに意義がある」

アリと云うコロニーの中で、分担があり働きアリの中でも、働くものと働かない者がいる？この働かないアリの役割：「反応閾値（いきどろ）」、仕事に対する腰の軽さの個体差、人間に例えると、人間にはきれいな好き嫌いなどない人がいて、部屋がどのくらい散らかると掃除を始めるかは、

個人によって異なります。きれいな人は汚れに対す「反応閾値」が低く、散らかっていても平気な人は高いというわけです。これがアリの社会では、必要な仕事が見れると、「反応閾値」の最も低い一部のアリがまずは取り掛かり、別の仕事が見れたらその次に閾値の低いアリが：と、低い順に作業を行う。つまり、個体間の「反応閾値」の差異によって、必要に応じた労働力がうまく分配されている。

こうした自然のメカニズムがあるから、仕事の指示を与えてくれる存在がなくても、コロニーが効率良く仕事をこなしていける。でも、「反応閾値」が皆同じで、仕事があるときは全個体で一斉に取り掛かるコロニーがあるとしたら、その方が処理できる仕事量は増えると思うが：。皆が一斉に働くシステムだと、同じくらい働いて同時に全員が疲れてしまい、誰も働けなくなる時間が生じる。

コロニーには、卵の世話などのように、短い時間でも中断するとコロニーに致命的なダメージを与える仕事が存在しているが、皆が働けなくなると、それができなくなってしまう：。アリだって働けば疲れるし、回復するまでには休みも必要だという。

働いていたアリが疲れてしまったときに、それまで働いていなかったアリが働き始めることで、労働の停滞を防ぐ。つまり、働かないアリがいるシステムの方が、コロニーの長期的な存続が可能になるのです。働かないアリは、怠けてコロニーの効率を下げる存在ではなく、むしろそれらがないとコロニーの存続が危ぶまれる、極めて貴重な存在です。

アリは一匹だと大したことはできませんが、集

団になって行動すると個体ではできないことをやってくるのけます。例えば、巣場所を選ぶとき、いくつかの候補の中から一番いいものを短時間で選んでいたりする。個体が集積すると、個体の能力以上の判断ができるのです。まだまだ解明されていないことは多いのですが、なぜ、アリの組織でそんな高度なことができるのか。その謎が分かれば、人工知能に応用できる：。最近では、この人工知能が世界一の囲碁名人を負かしている。恐ろしい時代が来るのかな：？

面白かったですね：動物に限らず植物でも、細菌でもウイルスでも、人間にとってはなくても、地球上の存在の仕組みには：？何百何千万何億年の中で仕組みされた生態系、僅か数十年しか生きていない極一部の人間のエゴによって、仕組みが壊されては：？

後僅かしか生きてられない、私自身：ソロソロ終括。

団塊の世代が大挙して介護を受け、いずれ鬼籍に入る。高齢者は、周囲に迷惑をかけずに人生を終るための準備が流行り、社会現象として“終活”が広がっている。残された者に迷惑がからぬよう生前整理、残された者が自身の財産の相続を円滑に進められるための計画を立てておくことなどが挙げられる。生きて動ける間に行う、身の回りの物品の整理と社会的な関係の整理。

企業や団体で活動している場合には、健康なうちに後継者を育て、いつ動けなくなっても代役がいるようにしておく。またその人がいないと動かないような重要な役は降りて、身軽になっておく必要がある。今年は、正に正念場ですね？

《読者投稿》

平城宮跡

京都府精華町 今井 直

六カ月の期間中に三六〇万人が来場し、盛況のうちに閉幕した『平城遷都1300年祭』から早や六年が経った。あの熱狂ほどではないが、毎年春・夏・秋には「平城京天平祭」が開催され、天平のロマンに浸るリピーターが多い。せんとくんも相変わらずの人気者だ。宮跡内の各施設では、ボランティアガイドさんが以前より増えたように思われ、皆さんがよく勉強され、知識が豊富である。

古都奈良の悠久の歴史・かけがえのない文化資産に、これまでどう取り組んできたのか、保存活動と共に今後どのように次代に継承していくのか、平城宮跡の今を見てみよう。

私は子供の頃、父によく奈良へ連れて行ってもらった。中村錦之助のチャンバラ映画を見るのが楽しみだった。電車に乗り大和西大寺駅を過ぎてまもなく、車窓に広がったのは雑草が生い茂る原っぱ。六十年ほど前の平城宮跡の風景だ。人の姿がなく風が吹くだけの草むらを電車は走っていた。小学校低学年ではまだ歴史を教わらないが、私はその頃から歴史が好きだった。きっかけは私の姉である。八歳年上の姉は奈良交通のバスガイドをしていた。当時、はとバス・奈良交通・宮崎交通が、観光バスの御三家と言われていた。巷ではコロンビア・ローズが唄う『東京のバスガール』が流れ、少女たちの憧れの職業だった。姉は歌も上手でウグイス嬢に適していたのであろう。また努力も怠らなかった。家でも常にテキストを片手に、名所旧跡の案内を練習していた。「門前の小僧

習わぬ経を読む」で、いつの間にか私もセリフを覚えていた。私が歴史・地理、特に奈良の文化に魅かれたのは、姉の存在が大きかった。しかし私はその分野に携わることもなく、仕事や日常生活の雑事に追われる日々が続く、少年時代の興味の世界に戻ったのはずっと後のことである。

平城京は唐の長安城をモデルに、碁盤の目のように整然と区画され、十万人以上が暮らしていたという。東西約^{4.3}km×南北約^{4.8}kmの長方形の都の東側には、相撲番付のように張り出す地域があった。東西約^{1.6}km×南北約^{2.1}kmの外京（げきょう）である。登大路という地名が示すように、外京のあたりは平城宮を見下ろす高台にあり、遷都を進めた実力者・藤原氏の意向という説がある。興福寺や元興寺など大伽藍が立ち並び、さらに東大寺や春日大社にも隣接していて、大宮人の絶好の遊楽逍遙の地でもあった。そこに人々が集まり、やがて都市へと発展していった。だから現在の奈良市の中心街は平城宮の上にできたものではない。延暦三年（784）に都が長岡京に移ると、平城京は瞬く間に荒廃していった。たった八十年でかつての都は田畑と化し、遺跡が乱れることなく地中に保存されることとなった。平城宮の発掘調査・研究にとつて、結果的にこれが幸いした。一方、千年の古都・平安京は時代ごとに都市が次々と重ねられ、まして現在の人口が百四十七万人とあつては、発掘調査は不可能といえる。

あをによし 奈良の都は 咲く花の

にほふがごとく 今盛りなり

（万葉集 卷三三八 小野老

馴つきにし 奈良の都の 荒れゆけば

出で立つごとに 嘆きしまさる

平城京 ビフォー・アフターの二首である。

（万葉集 卷六一〇四九 田辺福麻呂

長らく土の中で深い眠りにについていた宮跡に、光が当てられたのは幕末から明治にかけてだった。北浦定政が京跡を測量し、「平城宮大内裏跡坪割之図（だいだりあつぼわりのず）」を作成した。およそ半世紀後、関野 貞（ただし）は宮跡全域を踏査していた時、昔から「大黒（だいこく）の芝」と呼ばれていた小高い土壇が、大極殿の跡であることを突きとめた。土を突き固める版築（はんちく）が施されたために、硬くて耕作できない土地だったのである。昭和五十六年（1981）、大極殿址は凝灰岩を用いて整備工事が行われ、礎石を配置した基壇が復原されている。東西46 m×南北24 mのこの基壇からは、東に位置する若草山の眺望が素晴らしい。西側なら生駒山に沈む夕陽が絶景だ。おそらく聖武天皇も光明皇后と二人して眺めたのではなからうか。

天皇の即位式や朝賀、大陸の使節の謁見など国家的儀式に使われた大極殿は、平城宮には二つあった。ひとつは元明天皇が藤原京から移築した第一次大極殿で、七四〇年には遷都に伴い、再び解体され恭仁宮へ移築された。もう一つは七四五年に聖武天皇が平城宮に戻ってきた時、元の大極殿の約三百畝東側に新設された第二次大極殿である。因みに、元の大極殿は大幅に改造され、称徳天皇の西宮として利用されたという。

子供の頃のおぼろげな記憶だが、大黒の芝にあった一本松を思い出し、平城宮跡資料館で尋ねてみた。すると当時を知る長老がいて、「あの松は宮跡のシンボルでしたな。松くい虫にやられて枯れたけど、今も人の心の中で生きているんやねえ」

と、懐かしそうな表情を浮かべる。在りし日の一本松のモノクロ写真を出してきて、彼は「この黒松は、棚田はんが植えたんや」と語り出した。

棚田嘉十郎（ただなかじゅうろう）。明治から大正にかけて、平城宮跡の保存に立ち上がり一生をかけた人物である。奈良公園の植木職人であった嘉十郎は、宮跡調査中の関野博士の講演を聞いて感激し、「大黒の芝」を訪れてみて唖然とする。牛が放牧されて所々に糞が山のように積まれ、ひどい悪臭がたちこめていた。「実に見る影もなき有様、これを皇居の址と云われようか」と嘆き、宮跡の保存運動を決意したという。嘉十郎は地元有志に協力を求め、私財をなげうって跡地の買収にのりだした。貧窮生活の中、多くの著名人の署名を集めるために東奔西走し、明治四十三年（1910）には華族や政府高官らの支援も得て、平城遷都千二百年祭を成功させた。しかし、生活は貧乏のどん底で、過労から嘉十郎は失明同様であったが、寄付金集めに奔走する。だが、関係者の背任行為にあり、責任を痛感した嘉十郎は、大正十年（1921）、自宅で「義の一字を守れ」と大書し自刃した。享年六十二歳。支持者の尽力により、平城宮大極殿朝堂院跡が国の史跡に指定されたのは、死の翌年だった。

文化遺産であるという意識が希薄であったことを物語る。その後も一九六〇年代に、電車の検車区建設計画と国道24号線バイパス建設計画に対して、二度の国民的保存運動が起こり、建設計画は中止や迂回路へと対処された。そして今また、京奈和高速道路の建設でモメている。

平成十年（1998）に、文化庁による平城宮跡整備事業計画により、朱雀門と東院庭園が奈良時代の姿に忠実に復原された。またこの年、平城宮跡を含む「古都奈良の文化財」がユネスコの世界遺産に登録されて、世界的にも注目を集めた。そこで、平城遷都1300年祭のメイン会場にするべく、第一次大極殿正殿復原工事という国家プロジェクトが始まった。奈良文化財研究所による長年にわたる発掘調査や研究成果をもとに、古代建築物として現存する法隆寺金堂や東大寺転害門・薬師寺東塔などを参考にして、事業は進められた。

施工に際しては、古代建築の伝統技術を随所に組み入れながら現代の技術と融合させ、なおかつ今日の建築基準法に適合するよう工夫が凝らされた。外見ではわからないが、超高耐久コンクリートで固められた基壇の内部に、巨大な免震装置が組み込まれているという。

復原工事は加工作業も現場で行い、四十四本の柱はすべて国産のヒノキで、瓦を十万枚焼いたと聞く。工事期間中に何度か、作業の様子が一般公開され、延べ十二万人が来場して注目度の高さを示した。私も見学足場に上がって、屋根瓦を葺く作業を間近で見る貴重な体験をした。ヒノキ材を槍鉋（やりがんな）で削る作業が特に印象深い。削ったばかりの木クズはいい香りだから、頂戴して持って帰り、枕元に置いたり湯船に入れたりして、

ストレス解消に役立ったのは懐かしい思い出。総工費百八十億円、八年八カ月の歳月をかけて、大極殿は竣工した！

大極殿は文化庁が建設したが、敷地全体は国交省の管轄下にある。さらに県や諸団体がからんで複雑なため、整備の主体も文化庁から国交省に移して、『国営平城宮跡歴史公園』と名付けられた。宮跡の発掘調査はまだ全体の約三割程度で、民有地の買い上げなど課題が多く、国営公園の整備事業は、今後五十年ほどかかるとも言われる。例えば、城内の民有地は立ち退きが原則であり、転売や増築・新築はできないと聞いた。

また世界遺産は、文化財保護の不備などを理由に、登録を抹消されることがある。遷都祭の後、ユネスコからいくつかクレームが出たようだ。このようなマイナス面の噂について、当事者は誰も本当のことを話してくれない。推理すれば、大駐車場・近鉄奈良線・大型車も走る県道・大極殿院の回廊などが、クレームがついた対象であろう。

噂を裏付けるように、既に整備事業が進められている。大々的なのは、国営公園の正面入口となる朱雀門付近だ。遷都祭から存続していた駐車場と平城京歴史館は、今年六月末で閉鎖された。宮跡の外側で公園に隣接する積水化学の工場が移転してすでに更地になっており、ここに駐車場を新設する計画になっている。幅20mの朱雀大路の両側では、平城宮跡展示館・歴史体験学習館やレストランと観光案内所も、建設が始まっている。

整備事業で最大の難関は、鉄道や道路の移設問題だが、現在は全くの白紙状態だという。近鉄奈良線を地下化するのが美観の点で最もふさわしいが、大和西大寺駅は国営公園の最寄り駅だけでない

く、京都・奈良・大阪・橿原と直結するターミナル駅であり、膨大な事業費が必要になるのは、火を見るより明らかだ。

大極殿の前庭でも今春から工事が始まっている。南北319m、東西177mにわたって大極殿を取り囲む回廊を作り直すという。今ある建造物は、遷都祭に間に合わせるために、予算とか時間がなかったのか、ともかく回廊というより柵にしか見えないう。大極殿と比べて誠にお粗末である。今回の復原事業では、遺跡調査に基づいて、回廊と共に南門とその両脇に東西の楼閣を設ける計画だ。回廊は築地塀をはさんで内側と外側に屋根のついた通路で、複廊形式である。観光客にも分かるよう、整備事業をPRする「大極殿院情報館」がオープンして、縮尺1/200の精密な復原模型が展示されている。これを見る限り、決して大極殿正殿に見劣りすることはない。

ただ、予算の関係で完成の時期はまだ確定していないらしい。大極殿復原工事と同じく現地で加工・組み立てだから、資材保管庫と加工場を兼ねる立派な建物が大極殿の前庭に鎮座していて、暫くは目障りである。天平祭にも影響するだろう。

当分は工事で騒がしくなる朱雀門の入り口に、棚田嘉十郎の銅像がたっている。泉下の嘉十郎はこれを見て、何と言うだろうか。黙ったままの彼は左手に宮跡から出土した瓦を持ち、心もちあげた右手は遠くを指差している。指差す先には大極殿がある。

孫との散歩

藤 静子

柔かい陽射しを受け、幼い孫と自然豊かな公園を散歩する。時に抱っこをし、そこから温もりを感じ、安堵感を覚える。

孫との散歩は、精気が漂う木々からの爽風と、太陽の暖かさを充分に浴び、至福の時に感謝する。木漏れ日の先に、黄金色に光る「どんぐり」を見つけ、孫と喜ぶ。

若い頃は、この様なゆったりした日を過ごすことは、時が止まって、時代から取り残されてしまうような、そんな気がしていた。

いつも気がせき、桜の花を横目に車で通り過ぎ、いつの間にか、葉桜になっていた。時は目まぐるしく過ぎて行った。

今、孫との散歩で、地面に積もった桜の花びらを両手に抄い、空に散らし、そよ風に舞うさまを「きれいね!」と、麗らかな日を楽しんでいる。太い桜の木の幹に、新しく芽を出し、小さく咲いている花を見て「ひこばえ」と言うのよ! 可愛く咲いているね! と言いながら、孫との一時に、幼な子の成長を願う。

現在シリアの内戦等、中東で戦争が続く難民が溢れ、幼な子が無残な死を遂げ、見るに耐えない。

第二次世界大戦の実験の体験から、作家、野坂昭如さんの「螢の墓」からも、戦争はあまりにも残酷で、虚しい。

昨年帰還したソユーズ号の宇宙開発で働く油井亀美也さん達を見ると、世界中から、チームとして集まり活躍している。

そこには、争いは無いと言う。ノーベル医学賞受賞者の大村智氏の功績で、アフリカの子ども達

の失明が救われ、未来に希望を持てるようになった。

今、一面芝生の公園の中では、幼稚園や保育園の子ども達、サークルの親子達の歓喜の声がわきあがっている。

左手には深い小川が流れ、小さい吊り橋が掛けられている。橋を渡るとどこ迄も続く芝生の向うに、レストランや美術館、その奥に子ども達の遊具場がある。

吊り橋を渡らず、真っ直ぐ進むと、低く板を延ばし四季折々に風情を変える桜の木と並んで、コンクリ畳が細く坂迄敷き詰められている。坂を登り木立を抜けると前方には噴水が見える。D51の機関車が置かれた、児童公園には沢山の遊具がある。

そこへ行く途中、両手を上げ、抱っこと言って、私の腕に抱かれ喜んでる孫に、未来が輝かしいものであつて欲しいと願う。

昨年九月成立した「平和安全保障関連法」や南シナ海中国の埋め立て、隣国の情勢からも戦争は絶対に起こしてはならない。

長く続いたデフレ時代からも言われて来た日本経済の危うさにより、日本国の崩壊もあつてはならない。ましてや人を殺してもいけない。

テレビという、ガラス張りの媒体から、今の世は、良い事もわるい事も、見る側の意志に関わらず、何度も映像が繰り返され、その影響で、負の連鎖が起こる。ごく一部の出来事も日常茶飯事のような錯覚をし、麻痺して来る。

悪い事をすれば、当然受けなければならない罰、自己責任の時代とはいえ、報道の難しさを痛感する。

自分自身が、豊かな人生を歩むことに大切なのは、教育であると思う。特に低学年の道徳が不可欠と思う。

そんな世の中にも、
美しい音楽がある。素晴らしい芸術がある。
美しい自然がある。素晴らしい季節がある。
美しい風景がある。素晴らしい科学、医療、その他の発展がある。素晴らしい食文化もある。

人それぞれの心の欲求は、無限である。それは宇宙開発への果てしない発展を遂げる。
公演の帰り道、突然クラスがカーと鳴いて飛んでいった。抱いている孫が笑い、私もつられて笑った。

燦々と降りそそぐ、優しい光に包まれて今孫との散歩。
最良の日を感じている。

養生日記

堀江実穂

(某月某日)

ファミリーマートに買い物に行った帰りのこと。
交通安全のおじさんに声をかけられた。

「女っぷりが良いねえ。旦那さんは居るの？」
「結婚してます」

思わずそう言ってしまった。おじさんは、
「そうかい。旦那さんに可愛がられなネ」
と言葉を返してくれた。ちよっぴり嬉しい気分になった。

別の日、作業場へ行く途中のこと。軽トラック

が、いつもの場所に止まっている。通り過ぎようとしたら、知らないおじさんが窓から顔を出して、
「いつもここ通るよね。美人さんだね」

と言うと、飴を三つ渡してくれた。

突然のことだったが、素直に受け取り、

「有難うございます」

とお礼を言った。おじさんは、

「美人さん今日も仕事頑張ってるね」

と言った。突然に美人さんなんて呼ばれて、身体が引けてしまったけれど、悪い気はしない。身びいきに見ても自分を美人だとは思ったことはないけれど、心の美人は少しだけ自信があるし、心はお洒落だとも思っている。

声をかけられたことで、自分に少しだけ自信が持てた。そう、私は未だ女だ。蓼食う虫がいたっていいのだ。

(某月某日)

人間は誰しも悩みを持っている。

悩みのない人間なんていない。

悩みを持つから人間なのだ。

それにしても私には何て悩みが多いのだろうか。

悩みが洋服を着て歩いていけるようなものか。

何時も悩みに押しつぶされそうになる。

ある日のこと。作業所のN君に、

「N君も十八歳。悩みが沢山あるでしょう」

と聞くと、N君は、

「悩みなんて全然ないっすよ」

と即断に返事を返してよこした。

ニコニコ呑気なN君の笑顔を見ていたら、自分の中の重荷の綱が切れて「ドーン！」と落ちて行くのを感じた。

《風の呟き》

閑居山（かんきよさん）のこと

打田昇三

どうでも良い話で恐縮だが「小人閑居して不善を為す」と言う諺がある。名前の印象が良くない所為か、標高一九六メートルの龍神山が採石場として見る影も無く崩されているが、地図上では「山」として記録されているのに、四・二キロ南東にある閑居山は標高二〇〇メートルでも地図上では無視され山にされていない。その代り「閑居山大師」として寺院マークで表され「百体磨崖仏」の注記がある。「百体磨崖仏」は茨城県が史跡として指定したらしいが、其れとは別に此処には人工的に掘られたと思われる岩窟「俗称・金堀穴」が在り古くから知られていた。

昭和時代に入り特に第二次大戦中になると此の山は忽然として秘密のベールに包まれる。現在でも明確では無い其の原因は軍部が抑えたからだと推測は出来るが公言は出来ない。此の山は鹿島灘から上陸して来る米軍を迎え撃つには地理的・地形的に格好の場所らしいが、其の為には上陸して来る敵軍に此の近辺を通過して呉れるように前もって頼んで置く必要があったように思う。

閑居山は、石岡から菖蒲沢方面に行く県道一三八号線が土浦方面から来た県道六十四号線と合流する地点の西方に在る。言うまでも無く本来は軍事施設では無く純然たる仏教遺跡で有り、其の古い歴史を探ると次の様なことになるのである。

地元には閑居山についての言い伝えが有るらしく其の元となる史料は、或る旧家に残されていたと言う「閑居山縁起」である。都合の良すぎる話ではあるが、其れに依ると諸国遍歴中に此処に

来た(？) 弘法大師が靈感を覚え、思わず山を見上げると閑居山が金色に輝いていた。然も辺り一帯に芳香が漂っている。大師は洞窟前の大石の上で瞑想に耽っているとき、軽快な音楽と共に夢の中に阿弥陀如来が現れ、「此の土地の住民は信仰心が薄くて教化し難い(其れだけ恵まれた土地なのである)：後は宜しく頼む」と愚痴をこぼした。

目が覚めた弘法大師の傍らには一巻の経文が残されていたので、大師は其の経文を大岩の下の方に埋め、更に岩の中を覗くと行基菩薩(弘法大師より七、八十年前・奈良大仏建立に貢献)が刻んだ十一体の仏像が在った。そこで此の地に寺院を建立して真言密教の霊地とした：という。閑居山縁起には「：歩を此の山に運ぶに願として成就せずと言うこと無し。此のこと遂に天聴に達し鳥羽天皇(其の死により保元の乱が起きた第七十四代天皇)の天永年間(一、一一二) 御祈祷の事有りしに御願速やかに成就しけるによつて願成寺の勅号を給りて数多の寺領を付し給へり」とあるから鳥羽天皇のことは本当らしいが、日本仏教史の上で弘法大師伝説は数え切れないほど有るので、真偽の程は何とも言えない。

なぜ閑居山が弘法大師開創と言われたのか：単純に考えてみれば、此処に在った寺院が真言宗の寺院であつた為に縁日などが「弘法さま」と呼ばれて賑わっていたからであろう。旧暦の三月二十一日を縁日として、大正時代には山麓に在る旧志筑村や佐谷方面各地では仕事を休み、赤飯を炊き御馳走を作つて来客を接待した。石岡から徒歩で閑居山に向かう人々の列が出来たと伝えられる。

閑居山麓には酒盛の人々、露天商、旅芸人の興業などが展開して参詣者の列も進めないほど

の賑わい(混雑)であつたらしい。本堂でお札は当然ながら、熊笹に結び付けた袋入りの飴を「名物笹飴」として売っていた。是が飛ぶ様に売れたという。其のアイデアを出したのが、中志筑に在る曹洞宗雲集寺の当時の住職と言われる。雲集寺は戦国時代から曹洞宗の寺院であるから宗派を超えて近隣の住職たちが協力し合い地元行事の閑居山縁日を盛立てしていたのかも知れない。

閑居山に在った此の寺院は「志筑山惣持院願成寺」と号した。開基年代は不明である。周囲が土塁と堀に囲まれた城のような寺であり、立派な五輪塔が在った。南北朝時代に志筑城に居た南朝方の益戸氏菩提所と伝えられる。山の中腹に弘法大師伝説を持つ洞窟と摩崖仏が在り山麓には頑丈な願成寺が建立されたのである。室町時代になると南朝は衰微し、天皇も北朝系に変わるから南朝系武士の菩提寺が寂れても仕方が無い。それでも閑居山自体に弘法大師伝説が伝わっていたから昭和初期まで弘法様の賑わいを残していたのである。

願成寺縁起には「醍醐山中将法印乗海、戒行兼備の名徳、故有りて東国に下り当山に住して灌頂の密壇を開けるに負笈の者争い来りて密灌を掛け、中にも寿仁、昨日の両師、其脈を得て数多の廃寺を修し所々の伽藍を創む。当国の密教、此の時を盛とす」とある。乗海は源氏が挙兵した頃に没したらしい。其の時代は筑波山麓に館を構えた日本一の豪族・大掾氏の支配地内である。修験派の優れた僧たちが閑居山に来るようになり都から遠く離れていても此の地が「真言密教の拠点」となつたことが推察できる。地元には断片的な話しか伝わらない閑居山だが鎌倉幕府の公式文書である「吾妻鏡」には次の様な出来事が記録されている。

：建保六年(一二一八)三月二十三日、甲午、晴、今日、常陸国志筑郷内願成寺住僧等有参訴事、檢注使以新儀可入勘安寺領之日張行云々仍可停止之趣右京兆下知給之：

つまり鎌倉幕府第三代將軍・源実朝の時代に幕府の檢注使(けんちゅうし)が願成寺の寺領を横領した―此の役職は国守の代理として国内を巡回し課税の根拠となる領地を檢分するのが任務であり通常は国府の次官が担当していた。多忙では有るが役得の多い仕事であつた―願成寺でも役人の不正が行われたので僧たちが幕府に訴え、幕府は執権の北条義時(頼朝夫人・政子の弟)が役人を叱つて寺領は返還されたのである。

閑居山と願成寺が繁盛したのは室町時代のようなであるが、次第に戦乱の世となり応仁の乱が収まつた五十年後ぐらいに恐らく佐竹と小田の抗争により兵火に罹つて願成寺は消滅したと思われる。再建はされたであろうが、かつての様に大寺院と言ふ訳にはいかない。徳川時代初期に志筑地方は出羽仙北から来た本堂氏の領地となる。本堂氏は国元に在った華藏院という寺と願成寺(跡)を併せて一寺を造り有慶阿闍梨(ゆうけいあじやり)と言ふ僧を住まわせた。阿闍梨は天台・真言両宗で教官の様な地位の僧である。此の人が隠居してから、其れまでは志筑山と呼ばれていた山頂に弘法大師の像を置き、近くに愛宕神社を建立した。

阿闍梨が隠居したから閑居山なのか、願成―願業―閑居なのか：各説があるらしい。現在の閑居山には明治初期の廃仏毀釈運動に依ると思われる頭部を壊された石像が路傍に在るだけで往年の賑わいを想起させる何物も無い。謎の岩窟を含めて過去は不明の俣で置いたほうが相応しいのかも

知れないが、繁栄した昔が伝えられるだけに「諸行無常」が切実に感じられる山である。

総合的判断

菅原茂美

私は今、血液のがん「悪性リンパ腫」を治療中（筑波大）で、「チョップ＋ステロイド」という抗がん剤投与を外来で行っている。極端に免疫機能が低下するため、当初「無菌室」入院であった。抗がん剤投与は、月1. 6〜8クールで終了予定。

ところが副作用というのか、第3クール終了後、突然右目が見えなくなった。予期せぬ事例に主治医は、第4クールを中止。しかし本命治療第一と考え、以来現在、第6クールまで終了し、順調に回復に向かっている。眼は眼科と連携を取り眼球に全く異常はないが、眼から脳に画像を送る神経束が炎症を起こしており、その原因が不明。片目では距離感がわからず誠に不便。キュウリやナスを収穫するのに、鉄で手前の葉っぱを切ったりする。お新香が一発でつまめない。何より困ったのは、自動車を自分で運転できない。慣れれば可能らしいが、現在、家族や近所の方の運転におんぶにだっこ。タクシーも時々利用するが超高額。

さて首題の件だが、極端に免疫が低下するため、バスや電車の人込みはドクターストップ。インフルエンザやありふれた菌がすぐ肺炎を起こす。更に家からあまり外には出るな！ 娘夫婦が医者の子供か条件が厳しい。庭や畑、人の少ない時間帯を見て公園散歩。外の空気は、家庭内のダニの粉末や、いろいろの細菌などの浮遊物より、はるかにきれい。万全を期する医者立場から見たら、

日和見感染など、危険因子は極力避けたい気持ちにはよくわかる。しかし患者からみたら、閉じこもって、あれもダメこれもダメでは窒息してしまう。短期間なら我慢するが、8か月も、ではやりきれない。総合的に判断し、生活習慣病など少なく、内臓年齢も若く、開放的性格の患者なら、少々の事は許されてよいのではないか。しかもステロイドは非常にハイテンションになる魔法の薬である。あれもでき、これもできそうな高揚感が強い。私も調子込んでこの会報の原稿を3か月分も一氣に書き込んでしまった。

そこで私の言いたい事は、世の中は「標準的基準」というものが物事を決める基礎になっている筈。統計的に中央値付近が基礎。しかしグラフには中心から遥か外れた部分にも、何人かの人はいる。それを無視するのはおかしい。英才教育などで「飛び級・飛び入学」は海外では盛んで、アメリカには18歳で大学院を出、博士号を持つ人もいるという。日本でも義務教育ではないが、大学入学では1997年から飛び入学が許されている。

治療経過・体力・気力・職業など総合判断で、万全の準備の下、かえって外へ出て活躍しながら治療した方が、治りも早い可能性もあろう。医者の言う事を聞かないのは自己責任だが、よしんば思わぬ悪方転換を招き、家族や多方面に迷惑をかけるかもしれない。しかしもう少し、自由度がほしいというのが私の望みである。残り少ない人生ならば、趣味を大事に、もっと自由に生きたい。

（もし、早死なら、国の福利厚生制度の節減に、貢献する事にもなるし……）

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第四・（五）

若宮出家（わかみやしゅつけ）のこと

戦争であるから仕方がないが、勝ち誇った平家方は高倉宮や源三位入道の一族、三井寺の僧兵など敵になった戦死者五百余人を首と其の他の部分に分別し、首だけを太刀や長刀の先に刺して、それを自慢そうに高く掲げて夕方には六波羅の平家本陣へ凱旋して来た。人道的には自慢する事でも無いのに軍兵たちは興奮して叫び交わすこと恐ろしいばかりであった。その中でも敵の大将である源三位頼政の首は、長七唱が宇治川の深みに埋めて隠したから平家に見つからずに済んだ。しかし頼政の子たちの首は、全部が見つけ出されてしまっていた。その中高倉宮は普段から人目につく暮らしをしていなかった。誰も知らなかった。

それを、孝謙天皇時代に登場した和気清麻呂の子孫で宮中の医官を務めていた典薬頭定成（てんやくのかみさだなり）が診察をしたことが有るというので急ぎ呼び出したのだが、嫌な役目を察知して医者が仮病を使い、出て来なかった。

そこで一人の女房を呼び出したところ、一目見て泣きだしたので宮の首だと断定した。高倉宮は平家打倒の旗挙げをする迄は暇であったから、あちらこちらに妻子が居て、今回の身許を鑑定するにも役立ったのである。そのうちの一人は八条女院（はちじょう）に、ういん鳥羽天皇の第三皇女で膨大な領地を相続したに仕える高階伊予守盛教の娘で三位局（さんみのつぼね）と

言い高倉宮との間に七歳の男児と五歳の女兒が居た。高倉宮は八条女院の准養子であつたから、平清盛は弟の池中納言頼盛を通じて八条女院に対し「お屋敷内にいる高倉宮の子たちを男女に関わらず引き渡すように！」申し入れた。是に対して女院は「今度の合戦に先立ち、周りの女どもが恐れてこの屋敷を逃げ出してしまったので居りません」と答えた。

ところが、此の事を頼盛が清盛に言うとき清盛は怒つて「其処に居らず他の場所に逃げられる筈が無い。それならば武士を行かせて家探しをしろ」と言つてきかない。頼盛の妻は、宰相殿と言つて女院の乳母の娘であつたから日頃から親しくしていたのだが、清盛の厳命を受けて別人のように厳しい態度をしている。是を見た七歳になる子が、

「是ほどの大事になつては、とても逃れることは出来ないでしょう。どうぞ、私を（平家に）差し出して下さい」と健気に申し出た。是をご覧になつた女院はハラハラと涙を流され「人の子の七歳八歳と言えど何事にも分別は付かぬものを…それなのに自分の大事を弁えて、この様に申すことの愛おしさよ。（悲しい運命で育てることが出来なくなる者を、此の六、七年の間、手塩にかけ慈しみ育てて来て此の憂き目を見ることになつた！」と、涙を堪えることが出来ずに居られた。

頼盛が重ねて催促をするので、女院も力及ばず遂に若宮を手放す覚悟を決められた。母親の三位局は、今生の別れなれば、如何ばかり名残り惜しいことであつたろう。泣く泣く着衣を替え、髪を整えて若宮を連れて来た。女院を始め、仕える女房たちから、小間使いの者まで涙にくれて悲しく見送つたのである。平頼盛は若宮を自分の車に乗せて六波羅に連れて行つた。

平家屋敷では平宗盛が此の若宮を見て其の態度に感動し、清盛に言つた。「なぜか分かりませんが此の宮の態度が余りにも愛おしく思われます。どうか理を曲げて、是非とも私に此の宮のお命を預けて頂きたいお願い申し上げます」

是を聞いた清盛も珍しく素直に「それならば早々に出家をさせてしまえ」と言つたので、宗盛は此の事を女院に伝えた。女院も「何の異存もありません。どうぞ、その様に」と言われた。それにより此の若宮は僧になり、京都右京区に在る真言宗の仁和寺（にんなじ）に入つた。此の寺には高倉宮の兄が高僧としていたので、其の弟子になつたのである。後に「東寺」の一の長者安井の宮僧正道尊と言われたのは、此の人物である。

巻四の残り三項目は平家に抵抗した組の余話なので、少し長くなるが続けて書いて置く。

通乗の沙汰（とうじょうのさた）のこと

高倉宮以仁王が源三位頼政に担ぎ出されて平家に反旗を翻（ひるがえ）したため、その遺児たちが予想外の辛い憂き目も見る事になつたが八条女院に比護されていた若君は一命を助けられて僧となり、後に一角の人物になつたようである。

以仁王も忙しい人物で奈良にも子供がいたけれども、藤原系で以仁王と血縁にあつた女性に育てられていた。逮捕されるおそれが出たので養父が出家をさせて北陸・中部地方に隠した。やがて木曾義仲が上洛する際に主君にしようと連れてきたのだが、僧籍を離れ「還俗（げんぞく）宮」と呼ばれても木曾義仲の軍には加わらなかつたようである。

嵯峨北山の辺り（野依）に住み野依宮と呼ばれた。

話は變つて、昔（藤原道長時代 通乗（とうじょう）と言う古い師が居た。藤原頼道（道長の長男）や弟の教通を「三代の天皇に閑白として仕え共に八十歳まで」と占つて違わず、藤原伊周（道長の従兄弟）を「流罪の相がある」と言い当てた。

また聖徳太子が、第三十二代・崇峻天皇の眼中に赤い部分（文様）が有るのを見て「殺害されるなど横死の相有り」と預言したところ、其の通りに蘇我馬子の示唆を受けた東漢直駒（やまとのあやのあたいのこま）に殺害された。

古代の人々は誰でもそうであつた訳では無いが専門の占い師で無くても、此の程度の的確な占いをしたものである。それなのに相少納言が高倉宮を占つて（余計な真似をして）「皇位に就かせ給うべき相がある」と、反平家運動の盟主に担ぎ出し、其れが為に命を落とさせてしまつたことは誤りでは無かつたのか？（巻第四、源氏揃）

かつて醍醐天皇の第九皇子であつた兼平親王や村上天皇の第七皇子であつた具平（ともひら）親王などは、二人とも「前中書王」「後中書王」と称された方であつたが皇位に就くことも無く、そうかと言つて謀反を起こして皇位を狙うことなどなさらなかつた。（醍醐天皇も村上天皇も、共に賢明な君主と称された方である。また、「中書王」とは中国の用語で皇室を指す。つまり天皇に相応しい人物ということである）

また後三条天皇の第三皇子であつた輔仁（すけひと）親王も學問に優れ才能の有る人物であつたから、第一皇子の白河天皇が未だ皇太子の時に、次の皇位（白河天皇の後には輔仁親王を即けるように遺言をされたのだが、白河天皇が是を守らずに自分の子（堀河天皇）を即位させた。その、せめてもの償いのように輔仁

親王の子（有仁）に源の姓を授け、官位を無から一氣に三位に叙して中将としたのである。源氏の姓を授けられ、無位から一氣に三位に叙された者は嵯峨天皇の子で陽院大納言と呼ばれた源定（さだん）の他には無い。

一方、平家は、高倉宮謀反に際してその調伏祈禱を行った高僧たちを表彰した。さらに身内のお手盛り人事で平家惣領・宗盛の子で十二歳になる清宗を「三位の侍従」にした。通常の場合、侍従職は五位であるから、平清盛の思ひ上がり人事に他ならないが、清宗の父親・宗盛も同じ年齢の時に兵衛佐（五位）になっていた。何の功績も無いのに「上達部（かんだちめ＝高級公家）」に上がるのは身分の違う摂政関白家の者以外にない。それに対して平家は「源以光（罪により仁王の名を改めた）及び頼政父子を追討した功績」としているが、高倉宮という現・太政法皇（後白河）の子を討つさえはばかりあるに、その人の名を皇族名で無く呼んでゐる。浅ましいことである。

鵜（ぬえ）のこと

現代は鳥類でもやたらに捕獲することが禁じられていると思うが、かつてシベリアから日本まで飛んできて「かすみ網」に騙された鵜（つぐみ）と言う鳥が居た。その仲間の「虎鵜（とらづぐみ）」を「鵜」と呼んだらしいのだが、此の話に出てくるのは怪物にされた動物であるから、小鳥のように可愛いのは無いであらう。この章段は平家打倒の旗を振り翳して、あつさりと負けた源三位頼政の勇氣に對し敬意を表するために書かれたような内容であり、実際には何か得体の知れない怪物を頼政が退治した、という話

が中心になっている。

源三位頼政（出家したので「頼政入道」と言う人物は、摂津守頼光から五代目、三河守頼綱の孫で兵庫頭仲政の子である……と原文に書いてあるが、是を系統的に示すと次のようなことになる。清和天皇―貞純親王（陽成天皇の弟）―源経基―源多田―源頼光（足柄山の金太郎など四天王を家来にした）―頼国―頼綱―仲政―頼政。

平清盛が頭角を現した保元の乱には、頼政も加わったのだが、依怙（いこひ）愚直（ぐし）いさ人事で碌な恩賞も貰えなかった。また平治の乱にも親類と別行動を取ってまで清盛と同じ官軍に属したのだが是も無視されて平家が栄光を独占した。

仕事だけは内裏守護の天皇に近い場所勤務をさせられたけれども、平家物語の最初に出てくる「昇殿」も許されず、定年間近になって和歌を詠んで不遇を訴えた―「人知れず大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」……当時の勤務評定は和歌を詠めば良かったようで、此の歌によって、ようやく昇殿が許され位階も正四位下になった。

暫く経ってから次を狙ってまた「昇るべき頼り無き身は木のもとにしい（椎＝四位）を拾ひて世をわたるかな」と催促をしたので従三位にして貰った。そこで出家をして「源三位入道」と呼ばれるようになり、年齢も七十代後半に達していた。

此の人の生涯の名譽となる出来事は、四十代後半から五十代にかけて仁平年間、近衛天皇の頃に起こった。夜になると天皇が何かに脅えて（おびえて）寝られず時には氣を失うこともあったのである。尤も三歳で即位した天皇であるから夜中に脅えても恐れなくても仕方が無いのだが、馬鹿な取り巻き連中が祈禱上手とか、名僧・高僧などを集めて天皇の周りで秘

法と称する怪しげなことを始めたのである。是では天皇を驚かすだけで効果の有る筈が無い。天皇が恐れるのは午前二時頃で、丁度、その時刻になると東三条の森のほうから黒雲が湧きあがって御所を覆い尽くすようになる。

幾ら天候不順でも、同じ場所から定期的に黒雲が湧く筈は無いのだが、月齢が浅く闇夜が続いたということであらう。いずれにしても天皇が寝ないことには回りの者も寝られないから、公卿たちが集まって対策を協議した。二代前の堀河天皇の時代（寛治年間）にも似たようなことがあり（堀河天皇も八歳で即位）其の時は八幡太郎義家公が呼ばれて紫宸殿（ししんでん＝即位などの大礼を行った内裏の正殿）の大床に侍していた。堀河天皇が怪物に悩まされる時間に弓の弦を三度弾いて音を出し「前陸奥守源義家」と大声で名乗りをあげたところ戦場で鍛えた声に周りの者が驚き、ついでは妖怪も怖気づいて、天皇の病気が治った。

そこで近衛天皇の病氣も「妖怪の仕業」と勝手に決めて武士に宿直させることにした。当時は武士の地位が低く、天皇の傍に寄れないのだが病氣治療の名目で、源氏・平家から武芸に秀でた者を選んだ。指名されたのが源頼政で原本には「兵庫頭（ひょうごのかみ＝従五位）」とあるが、実際には法皇庁辺りの下級武士であつたと思われる。

妖怪退治を命じられた際に「武士は逆賊を討ち朝廷に逆らう者を平定するのが仕事ですから目に見え無い化け物退治は任務外です」と断った。然し天皇から命じられたので仕方なく宮中に行った。

頼政は信頼の出来る家臣で猪早太と言う者に風切りの良い矢を持たせ、自分は上下同色の狩衣に野鳥の羽で飾った鋭い矢を二本と重藤の弓を持ち早太と二人だけで紫宸殿南殿に昇って待機した。

二本の矢を持った理由は、最初の矢で怪物を射損じた場合の不名誉を考えてのことである。村上源氏の源雅頼という官僚が怪物退治に頼政を指名したというので、失敗したならば自分を選んで恥をかかせた人物も射るつもりなのである。

その様な裏の事情を知らない怪物は予定通りに東三条から黒雲となって宮殿の上空に来了。頼政が見上げると黒雲の中に確かに怪しい姿がある。その怪物は別に悪さをする訳ではなく黒雲の中に居るだけなのだが、場所が天皇の寝間の上であるから嫌われる。下界を見下ろすと強そうな武士が睨んでいるけれども気にしないでいた。しかし頼政のほう失敗ができない。心中に「南無八幡大菩薩」を念じて狙い充分に矢を放った。

狙い変わらず黒雲の中にいた怪物は腹を射られて落ちて来た。それを猪早太が取り押さえて小太刀で九回ほど刺したから、いくら怪物でも生きてはいられない。遠巻きに見ていた宮中の者たちが手に手に松明（たいまつ）を持って照らしてみると頭は猿、身体は狸、尾は蛇、手足は虎という貴重な動物で鳴き声はタイトルにある鵠に似ていた……と言うのだが、射殺した後で、どうやって鳴き声を調べたのか、其のほう不思議である。

宮殿の屋根に居た恐ろしい動物が退治されたのであるから、天皇は感激して皇室伝来の獅子王という名剣を褒美に下された。当時の左大臣・藤原頼長が剣を与えようと紫宸殿の正面階段を降りようとした際に、頃は卯月（四月）十日頃のことと雲井（夜空）に郭公（ほととぎす）が二声、三声鳴きながら飛んで行った。其の時に左大臣が歌で呼びかけるように「ほととぎす名をも雲井にあぐるかな」と詠めば、其れを受けた頼政が、右の膝をつき左の袖を広げ月を横目

に見ながら詠んだ。

「……弓はり月のいるにまかせて」此の場合、月が入る（いる）に、弓を射るを掛けて答えてから褒美の名刀を頂いた。天皇も回りの公家たちも源頼政が武士の道だけでなく歌道にも優れて人物であると感嘆したのである。退治された怪しい動物は丸木船に乗せて流したという。

怪物よりも怪しい話ではあるが、実は是だけで無く、二条天皇時代の應保年間にも似たような事件があり怪鳥「鵠」が宮中で鳴いて天皇が不眠症にかかる事件があった。自然豊かな時代のことであるから野鳥の一羽や二羽が宮殿に巢食つても不思議では無いのだが天皇が「うるさい！」と言えど退治しない訳にはいかない。経験者と言うので又しても源頼政に駆除命令が来た。

頃は五月の二十日過ぎ、宵のうちから鵠が宮殿の屋根に止まっていた。今回の鵠は内気な性格で一回しか鳴かない。少し雨模様の天気で闇夜であるから見え無いが、飛び去ろうとはしないから放つては置けない。しかし弓の名人も闇夜で的が分からなければ射られない。

頼政は先ず大鎧（おおかぶと）と言って音ばかり大きい矢を鵠が居そうな方角に放った。無口な鵠も驚いて鳴きながら空中に舞い上がった。そこで頼政は実弾と言うか雑音の少ない矢を放って鵠を撃墜したのである。これには宮中に居た役に立たない連中が感心して褒め称えたから天皇も褒美として高級ブランドの服を自ら頼政に着せてくれたのである。其の時には大炊御門（おおひのみかど）と言われた右大臣の藤原公能公が仲立ちをして「昔（戦国時代の中国）の養由（楚の国の弓の名手）は雲の向こうの雁を射ち、今の頼政は雨の中の鵠を射た」と感心をして「五月闇（さつ

きやみ）名をあらわせる今宵かな……」と呼びかければ、頼政は「たそがれ時も過ぎぬと思ふに」と答えて貰った衣を肩に掛けて宮中を退出した。

その後に領地として伊豆国を貰ったので其れを嫡男の仲綱に譲り、自分は三位の地位を与えられ丹波国五ヶ庄、若狭国宮川保を知行地としていたのであるから、穏やかに過ごせるものを、勝ち目の無い謀反を起こして、高倉宮まで道ずれにしてしまい、一族、我が身も滅ぼすことになったのは誠に残念なことである。

三井寺炎上（みいでらえんじょう）のこと

日本の仏教は原産地が中国である。中国には現代でも五十に近い民族が居るようなので中国仏教も十数種類の宗派があった。一民族の日本には一種類の仏教で良いのだが、輸入した段階で業者が違つて何種類かが入つて来た。宗派が違えばお布施の額からお経の種類まで違うのは仕方が無い。

此の章段のタイトル「三井寺」は比叡山延暦寺の天台宗に属しながら早くから別派を唱えていたから両者の仲が良くなかった。しかし平家の独裁が目立つようになると、どの寺院（僧兵）も平家に対して反感を持つようになる。源三位頼政はそれを考えて、先ず三井寺の僧兵を頼り、ついで延暦寺側も平家に抵抗することを期待したのだが、平清盛のサンタクローズ作戦でプレゼントが届いてから延暦寺が平家側になつてしまった。日本外史に、平家の参謀が「僧兵を味方に付けるために喰らわすに利を以てすべし」と清盛に進言した、と書いてある。歴史はお布施の額で決まる。

此の章段の書き出しは「日ごろは山門の大衆（延暦寺の僧兵）こそ、みだりがわしき（横暴な）訴えつかまつるに、今度は穩便を存じて音もせず」で始まる。源三位頼政が高倉宮以仁王を奉じて兵を挙げた合戦に、延暦寺側はプレゼントを渡されて欠席したから気が咎（とが）めるのである。

一方の三井寺と奈良・興福寺は主力が負けてしまったから賊軍、つまり朝敵になってしまった。

治承四年の五月二十七日には平清盛の四男・頭中将重衡を將軍とし、副將軍には清盛の末弟・薩摩守忠度を据えて一万余騎の大軍が三井寺園城寺へ向かって出発した。緊急情報に接した寺方では堀を深くし堤の上に楯を並べて防戦態勢を布いた。

平家軍は新聞を配るような時刻から早々と押し寄せて来て合戦が始まり、是が一日中続いた。

多勢に無勢なので三井寺側に犠牲者が増えて三百人ほどが討たれた。それでも夜まで延長戦となり平家軍は各所に火を放ったから本覚院、成喜院、真如院、花園院、普賢堂、大寶院、清滝院、教大和尚本坊、本尊寺、八面四面の大講堂（今日・釈迦・弥陀の三尊を安置した講堂、鐘樓、經藏、灌頂堂、護法善神の社殿、新熊野の御寶殿、総じて堂舎・塔廟六三七宇を焼き、智証大師（園城寺の再興に努めた第五代の座主）が残された一切経七千余巻、仏像二千余体が焼失した。くどくどと書かず「三井寺園城寺が全て焼かれた」と書けば済むのだが平家物語の作者は平家の悪業を強調するために、消防署なみの記録を取ったのである。

原本には「龍神が受ける三熱の苦しみも、いよいよ盛んならんとぞ見えし」と書いてあるが平家の許せない所業は、敵に回った三井寺に関わりの無い民家千八百五十三戸を焼いたことである。

是からの話は小難しい仏教界のことで敢えて言う

ならば平家に焼かれてしまった三井寺への弔辞のようなものであり、無くても良い文章である。

そもそも三井寺というのは、西暦六百年代に近江国の高官であった大友与太麻呂が個人の寺院として建立し、それを天武天皇に寄進したので天皇が御願寺とされた寺である。御本尊は、欽明天皇時代に百濟国から齎されたという伝説のある弥勒菩薩である―それを神通力で人間になったという教大和尚（きょうだいこうじょう）なる者が百六十年経ってから智証大師（弘法大師空海の甥・円珍）に譲り渡した―兎卒天（とそつてん）とも呼ばれる都土多天なる仏は、弥勒菩薩の宮殿である摩尼宝殿から天下り、五十六億七千万年後の成道の時を待たれるというのに、僅か百六十年で譲られたのは如何なることであろうか。その為には智証大師は此の場所を密教の靈跡として、早朝に他人が汲む前の清浄な水を汲む聖なる場所「御井（みい）」と名付けられたのである。

その様な尊い聖跡も今は天台の教法であった顕教も密教も滅びて修行の場も無く、鈴の音も絶え、夏季修行の場も失い、供える花も無く、聖水を汲む音も絶え、名の有る僧は修行も出来ず、学僧は学ぶべき道を閉ざされてしまった。それどころか平家に対する反逆者に味方した罪で、後白河法皇の第五皇子であった円慶法親王は職を解かれ、幹部の僧は十三人が免職となって検非違使に拘束され、合戦に加わった僧は「大衆揃」に登場した筒井明秀など三十余人が流罪にされてしまった。

この様な天下の乱れ、国土の騒ぎは只ごとくではなく是は平家の世も末になった前触れではないかと都の人々は噂をしたのである。巻四は終り、巻五では平家の福原遷都と源頼朝の挙兵が有る。

（巻第四終り）

「ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。
ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく（はげしく）心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。 月1回コース（受講料：¥6000 円） 2回コース（受講料：¥9000 円）

連絡先 080-3125-1307（白井）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡 13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

2016 年ギター文化館コンサートシリーズ

第8回里山と風の声コンサート

(2016年8月21日・日曜日 開場 14:30 開演 15:00)

里山に風が吹く時、風に景が生まれ詩が生まれます。

雑木林は風の景とともに言葉を紡ぎます。

言葉は詩を紡ぎ出し、音楽を紡ぎ出します。

今年も八郷の丘の風が景となって、言葉を紡ぎ弦音を紡ぎます。

言葉の紡ぎ人=里山の瘦風 白井啓治



3年連続での本コンサートへの参加となります。
甘いマスクと繊細な弦音を紡ぎだす北海の貴公子
こと亀岡三典。魅惑の弦音をお愉しみください。

- ・ソナタ(J・トウリーナ)
- ・ジュリアナーテより(M・ジュリアーニ)
 - 1. リソルツィオーネ 5. アルモニア 8. アレグリア
- ・シネマパラダイス(モリコーネ)
- ・ひまわり(マンシーニ)
- ・禁じられた遊び(ルビーラ) …他。

常世の国の恋物語百第29話「湖の弦音」より、ヒロイン
吉生の里娘芙美がF・タレガの曲にのって舞う「舞詩」を
北の国の弦音の貴公子亀岡三典のギター演奏をバック
に朗読します。

- ・波に遊ぶ(パバーナ)
- ・風がためらって(マズルカ ト長調)
- ・風が波頭を爪弾いて(メヌエット)
- ・流海の波が風と舞って恋をして(ワルツ二人の姉妹)
- ・湖と風の明日の夢を紡いで(マズルカ「夢」)

弦音の紡ぎ人=弦音の貴公子 亀岡三典



コンサート料金4000円(前売券3500円)

ギター文化館 Tel 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

E-mail maipaboo@guitar -bunkakancom HP guitar-bunkakancom